

はじめに	0
1 カフト概観	1
2 斎王と古代の道	4
字名(その1)「一ツ家」、「板屋」、「板ヶ谷」、「市場」、 「一ノ木戸」、「越川」	5
3 斎王と谷筋の人々	8
川俣県造と川俣神社	9

◆午餐喫べて汽車にうち乗り柘植驛に向ふ。途中關町に至れば名物の菓子關の戸、關の戸と呼びて車の外を賣り歩く。關よりは山路なれば隧道も二つ三つあり。溪に架けたる鐵橋などありて、山の容、水の色、眺望頗る美しく、關西の函嶺[箱根]とも云ひつべし。

(大橋又太郎『千山萬水』増補第7版、明治32年、博文館)

◆關驛を過ぐれば、山は近し、加太より柘植に至るの間は、天下に名だたる險路にして、鈴鹿峠に連れる山の根を切り鑿きたれば、峰峙ちて、川流れたり。殊に大崖の築堤は、地を抜くこと八十呎、見下ろせば村の一ツ家微(ほ)の見えて燈の影も廻かなり。加太の隧道は九町ばかりもあるべき長さにして、その中央より伊勢と伊賀路と別るなり。

(大橋又太郎『続千山萬水』明治33年、博文館)

◆[明治26年の春]熱田から便船で四日市へ渡る、龜山と云ふところに一晚泊る、それから伊賀近江の國境を歩いた。

(島崎藤村『春』明治41年、東京朝日新聞連載)

◆汽車はやはり鈴鹿川の一支流加太川に沿うて幾度か渡り、二つのトンネルを潜って加太に上つていく、萬葉に「鈴鹿川八十瀬渡りて誰ゆゑか夜こえに越えむつまもあらなくに」と歌へる八十瀬とはこの加太越の溪流を云ふのである。錫杖ヶ嶽は左窓に近く峙って、岩山の姿が面白く見える。加太は山間の駅である。ここから汽車は尚坂路を登つて大岡寺山の長隧道を潜つて、柘植に下りて行く。

(谷口梨花『汽車の窓から一西南部』大正7年、博文館)

4 カフト語源解	13
5 字名とカフト	16
字名(その2)「神武」	16
字名(その3)「中在家」、「北在家」、「向井」、「金場」、 「梶ヶ坂」	17
字名(その4)鉄地名	19
むすびにかえて	21

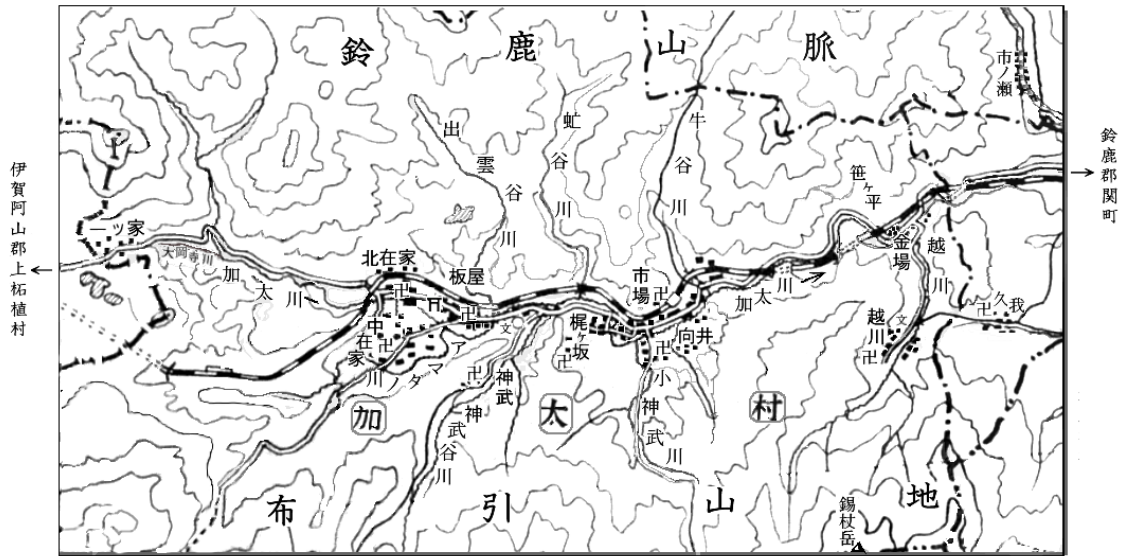
◆[名古屋から奈良へ向かう車中から]やがて汽車が山間に入り、溪流に沿つて登り始めると(中略)その山水のところどころに、さながら適宜な位置にちよこんと配置された陶器の置物のやうな家々、のんびりと紫の煙が其処から立ちのぼる屋根の瓦の色(中略)、壁の剥げおちた茅葺きの小家の形のおもしろさ。

(長与善郎「竹澤先生の顔」大正13年、『不二』連載)

◆東海道は、地質學で云ふ、敷島隆起時代以後の、洪積層と沖積層とが、大部分である。その前は、東海道の鈴鹿峠の近く、今の關西本線の加太トンネルのあたりまで、伊勢灣の波に洗はれてゐた。鈴鹿山脈は、淡路島のやうだつた。

(川端康成『東海道』昭和18年「満州日日新聞」)





加太村 概略図 明治25年測圖(大正9年修正測圖)を元に加工した。

はじめに

加太は、三重県の中西部、鈴鹿山脈と布引山地に東西10キロほどに亘って伸びる溪谷沿いの集落の総称である。長い間「加太村」であったが、1955(昭和30年)に関町の一部分となり、現在は、亀山市に編入されている。しかし加太という名は今も留めている。人々に知られることも少ないひそやかな山峡の郷邑である。

私の苗字はこの加太に由来する。14世紀に関盛宗という土豪がこの地に入ったときには、ここにはすでにカフトという地名があった。そこで、盛宗は自らの苗字もカフトに変え、鹿伏兎と表記した。私の遠い先祖である。

私は、この集落を半世紀以上前から、間をおいてだが何度か訪れている。

蒸気機関車が走っていたころの加太駅や神福寺。城跡に登り、また加太川や出雲川に沿って歩き、川俣神社を訪れ周辺をぶらついた。そのたびに、なぜかその風景にある種のなつかしさを感じ、心が和むのだった。自分の遠祖の地だからなのだろうか、年をとるにつれて、この「加太」の過去や、地名の由来にたいする好奇心も深まってきた。

なにしろ、この地名は、日本に一つしかないのだ¹⁾。この希少な名前をもつ加太を古代にさかのぼり、その古い姿を探り、そこから地名の由来を推測し、さらにその地名に秘められた歴史を探ってみたくなったのである。

加太については、文献史料も乏しいという。また考古学の成果にも目をみはる発見があったとも聞かない。そのうえ、私は、郷土史については門外漢である。探究の手掛かりは、何に求めればよいだろう。幸いに、亀山市には歴史博物館の資料公開のウェブサイトがあり、これは日本でも有数の先進的な試みで、また内容も充実している。

以下は、このすぐれた研究成果²⁾や、図書館、書肆などで手に入る文献などのおかげをこうむりながら、そこに、私が長らく扱ってきた表象解析の技法をいくらか取り入れて行った解釈歴史(メタ・アナリシス)の成果報告である。

¹⁾「大体に、一つしかない地名、他ではいっこう聞いたことがないというのが、古い(中略)と推定してまちがいはなさそうである」。柳田國男「和州地名談」(『地名の研究』)。実は、他に「加太」と表記する地名はある。和歌山市の加太と大阪府富田林市の加太である。ただし、前者は「カダ」、後者は「カタ」と訓(よ)み、地形からみて前者は「潟海」の「カタ」から、後者は新田のために埋め立てられた「湖沼」の「カタ」からきていることはほぼあきらかで、本論の加太とは由来が別である。一方、カフトと発音する地名がある。鹿伏兎村(現・愛知県津島市鹿伏兎町)と甲新田村(現・愛知県稲沢市)である。しかし、表記は加太でない。子細に眺めると、両者とも、木曾川下流左岸の氾濫原の日光川右岸に位置していて、前者は、江戸時代の湿原地帯を干拓した場所で、後者は、江戸中期の宝暦治水工事の対象となった新田地帯にある。すなわち、本論の「加太」より後に発生した場所だと推定され、また、「加太」からさほど遠くない地にあることなどから、おそらく、江戸時代前後に加太(鹿伏兎)からの移住民たちによってつくられた開墾地で、出身者の故地にちなんでつけられた村名であったと推定してよいだろう。すなわち「カフト」のコピーであろう。なお、全国のその他のカフトと訓(よ)み、「兜」や「甲」などと表記する地名は、基本的に、当地に小さな丘陵があり、これが兜の形に似ていることから命名された名前であるか、もしくは、武将の兜を祭る神社名由来だといつてほぼ間違いなく、これから検討しようとする「加太」と音は似てはいるが、表記も発音も根本的に異なると言い切つてよいだろう。

さらに、ここでは、知りえる個々の事実が指向する総体を説明するのに、最も妥当性のあると思われる、あるいは蓋然性の高い説明仮説を立ててみようとした。当然、仮説形成法で論ずるわけなので、帰趨が定まるわけではない。しかし、正答がないところでは、考究を留保するというのでは、学術的な姿勢としては妥当かもしれないが、ふるさと探しには禁欲的すぎるだろう。いうまでもなく、論理の飛躍や過剰な推認には注意を払ったつもりだ。ただ、偶然の解に行き当たるといふ楽しみは大切にしたい。ほんとうの結論(というものがあるなら)は後世に俟てばよい。

なお、本論では、以降「加太」を現在の行政上の地域に捉われず扱うため、その表記については、往古の「音」を反映していると思われる^{かふと}鹿伏兔や^{かふと}家富唐などの表記から推測される「カフト」をおもに用いたい³⁾。

1 カフト概観

東海道付け替え 古い過去にさかのぼってみると、カフトは、政権中枢と結びついた要路(官道)にあった。いわゆる「原・東海道」である⁴⁾。カフトの谷の西端は伊賀を介して、先進地帯である大和、近江に接し、一方、谷筋の東側は東国の始まりともいえる鈴鹿に開けている。見方を変えると、古代の二つの文化圏のどちらからみても辺縁にあったといえよう。だが、古代大和地方と、その天皇制機構を支えたアマテラスを祀り上げる伊勢の両者が、ともに身近に感じられる環境の中にもあったことも事実だ。

ところが、そういうカフトを抜ける古代官道に、ある大きな変化が^{しめつた}出来た。それは仁和2年(886年)の鈴鹿越えルートの開鑿である。このことにより、カフトは「官道」でも東海道でもなくなるのだ。いままでのコンテキストから類例のない取り残され方をしたのだ。唐突な地政学的転位によって、カフトに意味的停止が起こったのである。それは、同じように官道から外された大和街道上の他の集落の地理的条件とは異なるものだった。カフトは、谷筋以外に(山間の峠道は別として)通路をもたなかった閉域だったからだ。官道は、以降、単なる細い谷筋の一本の道⁵⁾、つまり村内道に成り下がった。と同時に、このことがカフトの谷筋に、珍しい^{そんないそん}村内村を可能にした。このことは後に述べる。

繰り返して強調しておきたいのは、全国には山あいの小村、僻村は数多くあるが、都にこれだけ近く、最重要な官道上にありながら、それが上代に終焉してしまう、という偶然を備えた所は他にはないだろうという点である。

過去の凍結 過去に起こったこの変容によりカフトの“古代”はその時点で急停止した。閉域となった結果、カフトにおける村内集落の名称(地区名または^{あざ}字名)は、後世、改名や分離や合併を被ることがなかった。これらの特質にくわえて、カフトは地形的制約で開墾地がほとんど増やせないということもあり、長い間、人口の大きな変化をみなかった。それは、村の精神的・構造的変化を緩慢にさせる素因の一つになっていたと想像できる。村は、「内」と「外」との少ない交流と相俟って、人口規模の安定により、村構造の保持を長らく続けることができたのだ。

半閉域状態 よく知られる大海人皇子、源義経、徳川家康がカフトの谷筋を通過したという噂がある。ここで注目したいのは、その伝承譚が指し示していることの意味である。これらが壬申の乱、本能寺の変、宇治川の戦いという歴史

²⁾ 亀山市歴史博物館のウェブ資料は、以下「亀山歴博」と略述する。資料の読み違いから生じる誤りの責めは一切筆者にある。

³⁾ 「伽夫登ト訓ズ」『勢陽五鈴遺響』巻之四

⁴⁾ 「少なくとも4世紀以降から」加太越えの「原・東海道」ルートがあったと「亀山歴博」は述べている。

⁵⁾ カフトの谷筋は直線で東西10km弱(2里4町4間)で比高差200m弱(西高東低)あり、江戸時代でもその半分近くは山道であった。とりわけ、柘植から「一ツ家」とその先「北在家」まで、「板屋」と「梶ヶ坂」のあいだ、「金場」前後の数キロ。川沿いの崖路がない部分では、山越えを余儀なくされていた。近代になって鉄路が敷かれた時も、三か所のトンネルで凌ぎ、迂回路を必要とした。古代、壬申の乱の大海人皇子の通過(伝承)ルートも川の瀬を濡れて渡り、崖になっている箇所は山越えであったと想像されている。現代の国道25号線から想像されるような「道路」でないことはいうまでもない。万葉集3156番の「鈴鹿川八十瀬渡りて誰がゆゑか夜越えに越えむ妻もあらなくに」の叙景は、鈴鹿峠越えルートがまだない時代の作だから、当然今の加太川(鈴鹿川の源流のひとつ)の箇所を指している。『源平盛衰記』にも「八十瀬の白浪分過つゝ、加太山にぞ懸ける。此山の為体(てい)たり、峯高して峙(そばだ)て上り。巖嶮して身を側て伝ひ、谷深して漲落の水早ければ、足を危して渡る。河を渡ては山路に上り、山を越ては河瀬に浸る。興を催す所もあり、心を摧(くだ)く砌(みぎり)もあり。角(かくし)て山路を出ぬれば、殖柘里…」という叙述がある(内閣文庫蔵慶長古活字本)。右岸、左岸いずれからも支流が注ぎ、旅人は幾度も溪流を交叉しなくてはならない。後世の多くの歌や注釈書で「八十瀬」を「鈴鹿川」とするのは、河川名に形式的に捉われた形式踏襲にすぎない。ちなみに、文化3年の「加太越奈良道見取絵図」(東京国立博物館)でも、加太谷には34の小橋が溪流に架かっている。

的大変事のための「緊急避難的」ルート⁶⁾として用いられたということである。すなわち加太谷越えの意味は、“非日常”の指標なのだ。後世のことであるが、宝永 3(1706)年に津藩主藤堂高睦が参勤交代で帰藩の際に津へ向かわず、あえて加太谷を通過して支城の上野へ向かったことも“非日常”の変事⁷⁾が背景にあったからだとしか思えない。あるいは、ヤマトタケルノミコが東国からの帰り、能褒野^{の ぼ の}まで来て力尽き、その化身の白鳥が飛翔して大和へ帰ったという伝承は、鈴鹿地方を塞ぐカフトが、東国から大和への“壁”であることの表象として読み解けるであろう。

このように、カフトの開域状態は、過去の保存に有利に働いたと思われる。ただし、開域とはいえ、二つの異なる山塊の間の溝なので、普通の谷と異なり、谷筋の両端は、かろうじて抜けられる。谷の東西には、後世に、宿場町(東に関宿、西に柘植宿^{つげ}⁸⁾)が形成され、相対的に、その中間にあたるカフトは、取り残された空域扱いになってしまった。外から人が谷筋へ入りこんでも、カフトに何らかの所用をもつことは少ないだろうし、ひたすら東西に延びる山峡を点にする集落を横目で見て通り過ぎるだけだった。そう断言できるのは、旅人や文人によるいかなる紀行文や日記にも、カフトについての言及が見いだせないからだ。

維新後の変化 ついでに言うておけば、変化は明治以降にやっと起こった。1896(明治 29)年 9 月の関西鉄道加太駅開業である(関西鉄道は、後、国鉄関西本線となり現在は JR)。さらに、カフトの特質を根本から崩壊させたのが、1965(昭和 40)年に開通した名阪国道である。この時から加太は南面にも三か所の通路をもつようになる。そして、国道 25 号線は決定的に壊死させられ、村に内部化してしまったのだ。これは遠い昔のカフトを見えにくくさせている要因かもしれない。

カフトの歴史概観 カフトという場所は、いくらか発掘されている遺跡からみても、古代から人の住処として存在はしていたようだが、しかし、その古代はもちろんだが、律令制下になってすらも、カフトは伊勢の国に属していたのか、伊賀の国に属していたのか⁹⁾これを明示する史料は存在しない。帰属先が人々の関心外にあったからだ。この鈴鹿山脈と布引山地のはざまにある、東西にのびた細長い「加太地溝帯」と呼ばれる溪谷は、官道でなくなったあとは、おそらく利害の対象にもならない、たんなる山間地であり、したがって、周辺の豪族も、覇権を及ぼす必要を感じていなかった地域だったと思われる。さきほどふれたように、カフトが長年に亘って大変化を免れた理由に加えてよいだろう。

一体、カフトは歴史的にどう位置づけをされた地域だったのだろうか。一般には伊勢の国に属する鈴鹿郡の一部といわれる。その鈴鹿郡については、諸説あるが、古来 7 つの郷(里)が存在していたらしい。明治 22 年に町村制が敷かれた時点では、鈴鹿郡は、2 つの町(関町、亀山町)と加太を含む 18 の村で構成すると定められたので、加太はあたかも古代から伊勢の国の一部だと思われがちである。しかし中世に伊勢(亀山あたり)の関氏の支配下にあったことで、そう思われているだけである。加太谷の笹ヶ平で 2000 年に発見された古墳は、その構築様式から伊賀地方のものに類似するという(「亀山歴博」)。つまり、この谷には、古墳時代に遡ると、西の伊賀の文化様式の痕跡¹⁰⁾が少なくとも認められるのだ。いうまでもなく、伊賀国は、天武天皇 9(680)年に伊勢国から分立して成立したが、それは伊勢国とは布引山地を介して、もともと別の文化圏に属しているという認識があつてのことだ。だから、二国の境界にあるカフトの文化的帰属は不明確であると言わざるを得ない。また、地政学的にもカフトを大和政権の果てととるか、東国の始まりととるかも微妙な問題だ¹¹⁾。上加太(伊賀寄り)と下加太(鈴鹿寄り)の住民の気風にも相当違いがあると聞く¹²⁾。

⁶⁾ 大海人皇子のころに「官道」という制度や意識があつたかは定かでないが、カフト谷通過が、吉野から美濃を目指す当時の最短ルート上にあつたことは確かだろう。

⁷⁾ 前年から続くお蔭参り狂乱で伊勢街道には群参の大混乱があり、津の本城に大名行列が向かうのは危険だという判断があつたと思われる。いずれにしても、カフト通過は異例のこととなり、道路や橋の改修に駆り立てられカフトの村民は「難儀した」という記録が残されている(「坂家覚書」)。

⁸⁾ 関宿は、のちの東海道の著名な宿である。上柘植村(現・伊賀町柘植町)のそれは、伊賀盆地ならびに杣街道の旅人用のもので寛延のころの戸数は161戸、人口497人。『宗国史』(津藩の藩政史)。

⁹⁾ 「伊賀國風土記阿閉郡加太庄又一東限家富唐岡」勢陽五鈴遺響鈴鹿郡之四

¹⁰⁾ とともに 6 世紀後半と推定される伊賀の奥弁天四号墳とカフトの笹ヶ平古墳の石室構造の類縁性が指摘されている。「亀山歴博」

¹¹⁾ 先に述べたように、ヤマトタケルノミコが力尽きたのが能褒野であつたことの意味は、そこが東国の終点を示し、そこから西、すなわちカフトからはヤマトの一族(垂仁天皇皇子の系列)が支配する伊賀だつたことを示しているのかもしれない。

鈴鹿郡に話をもどそう。つぎに注目をひくのは、カフトが明治以降の自治体組織として、江戸時代(おそらくそれ以前から)のまま、さほどの盛衰なく、単独で成立していた村であったことだ。(現在、鈴鹿郡は、三つの市、すなわち亀山市、鈴鹿市、一部は四日市市に再編され、鈴鹿郡の名前は消滅した)。明治時代までは加太村は外を9つの村に囲まれていたが、山地を介しているため村同士の接点は少なくいわば“孤立”した地域であったのだ。

カフトは、いくつかの区域に分かれていて、それぞれの地域に独立した名前があり、その地域ごとに寺を持っている。各地域は、あたかも村内村のようであった。この村内村という独特の在りようは、連邦制にも似て、ある象徴的な紐帯が過去にあったことを窺わせる。この紐帯が、後で述べる探究の大切なヒントとなろう。なお、この村内村は、今では「地区」とよばれ、一般の村であれば「字」にあたるものである。しかし、カフトでは、たとえば、「加太村字市場」とは言わず、「加太市場」と称し、これが現在も行政上の正式名称となっている。

村の姿 さいごに、もう少しカフトに即していくつかのことをみておこう。江戸時代に少なくとも確認ができる板屋、北在家、中在家、神武、市場、梶ヶ坂、向井の七地区(字)は、今日もそのまま存在する。その他に、かつては、加太金場かねば(あるいは金鑄場かねいば)と呼ばれていた地区と加太越川えちがわと加太一ツ家という三つの集落が加太に含まれていた。

「加太金場」と「加太越川」は、2005年に、関町が亀山市に併合(合併)されたときに、それぞれ「関町金場」、「関町越川」と名称変更になり、「加太」から離れた形になる。しかし現在でも神事祭事には加太に参加している。また加太一ツ家は1956年に阿山郡柘植町に編入され、これは後に伊賀市の一部となる。しかしこれら字名は所属に変更があったものの、その呼名は保持しているのだ。なお、江戸時代、加太村は、上記の地区に加えて、「平地」(または「平ノ沢」)、牛谷うしたん¹³⁾、「大谷」、「大杉」も字名として確認されている。しかしこれらは、名前は残っているものの、今日、集落の形跡はない。自然に放棄されたのか、災害で消滅したかは明確には分かっていない。地形的には平坦でなく、人家があったとしても、一、二軒の孤家があったとしか思えず、また耕地を想定できるような土地を認めたいのである。ただ、「平地」だけは、加太川の湾曲部分の内側にあり、狭いながら緩斜面(現在は叢林)がみられるが、加太川の氾濫にさらされる不安定な地形である。

加太の戸数と人口の変化をみると、1750年、380戸、1610人。1802年、348戸、1416人。1872年、366戸、1622人。1889年、407戸、2040人。1907年、378戸、2240人。1913年、383戸、2376人。1950年、2,566人。現在(2014年)、戸数は420(一ツ家除く旧加太村合算445)戸、人口1066人(同1131人)である。これで見ると、人口については家族構成の社会的要因での変化はあるが、戸数をみる限り、この250年間に激変をこうむっていないことに驚かされる。古来、カフトは周辺の村と比べて、比較的面積の広い方であったが、この面積は、一方、可耕地という点から見ると貧弱であった。明治40(1907)年の調査では、村の92%が山林で、田はわずか6%、畑地は2%であったのだ。現在でもこの比率はほとんど変わっていない。したがって、産物は、麦、菜種、木材、薪炭程度であった。米は自給できる程度だという。津藩の藩領だった当時(幕末のデータだが)年貢として1340石を課せられていた。しかし250年ほど前の太閤検地のときの数字(1713石2斗5升)から推測してみても、多分に帳面上のもので、とてもこれだけを、米で供出できたとは思われない。

とはいえ、カフトは周辺の村々と比べて、とくに貧しくもない¹⁴⁾。ある意味で平凡な村であり続けた。もう一つ、平凡という意味でいうなら、カフトの地理的な様相にも特徴が感じられない。非日常的な懸崖や大滝などのような風景として

¹²⁾ 正式調査ではないが、加太住人の一般認識として、上加太の通婚圏、通学先、買い物先は伊賀方面であり、下加太は関・亀山・四日市方面で、かつてはTV受信も、上加太は関西系で下加太は中京系だった、上加太は気質も働き者で行動的で集団性に富むが、下加太は、依存的、消極的、穏健だということを聞いたことがある。

¹³⁾ 牛谷は、あとでふれるように「市場」の別名あるいは、併せ名だったかもしれない。なお、カフトでは「谷」は多くは「たん(だん)」と発音する。これは、カフトと接する柘植(伊賀)を除いては聞かない。

¹⁴⁾ 明治5年の各村概況によると、加太村の戸数は366で人口1622人、馬15、牛149。酒造4、大工6、木挽77、鍛冶1、博労2という規模で、鈴鹿郡の中では、人口、戸数、ともにいちばん多い。とくに牛の頭数は群を抜いて多い。『関町史』

卓越したものはないのである¹⁵⁾。気象現象などにも特異なことがあるわけでもない。歴史的イベントの舞台になったこともない。特異な習俗や祭や行事などもみられない。

カフトというのは目立たない「山中幽谷」(『勢陽五鈴遺響』)でありながら、しかし、じつは、歴史を太古に遡ると興味ある特徴が見えてくると先に述べた。穏やかなカフトの基層に深く沈み込んだ過去とはなになのか。

2 斎王と古代の道

斎王群行 話しは、ここから、古代へ遡る。上代から鎌倉時代にかけて「^{さいおうぐんこう}斎王群行」という、国家権力にとってきわめて重要な宗教的習俗があった。

占いで斎王(イツキノミコあるいはイツキノヒメミコ)として選ばれた未婚の内親王や天皇家の縁者(女子)が、都から伊勢の天照大神を祀る役目を負うために、途中で幾度も清流を求めて禊^{みそぎ}おこないつつ、旅をするのである。そして、天皇交替まで、伊勢の^{いつきのみや}斎宮¹⁶⁾で生活をする。この群行は盛時には、数百人の威儀を整えた行列だったという。この群行がカフトを幾度も通過した軌跡からカフトの古い姿を探りたいのだ。

その始まり これは、いつごろからの習俗であろうか。史料に基づく「正史」では、斎王の始まりを、天武時代(7世紀後半)に設定する説が唱えられている。しかし、私は、その開始時期を「状況的に」3世紀末から4世紀の初めごろに遡らせたいのである。すなわち。崇神・垂仁政権時代である。その詳しい説明は文末の補注¹⁷⁾に記したが、簡単に言えば、この両天皇のころにこそ、まさに斎王制度を「絶対に必要」とした状況があったと考えるからである。諸豪族の中から、大王として抜きだして周辺を平定するために、崇神・垂仁は、ヤマトでの共通神アマテラスを伊勢神宮(皇大神宮)に鎮座¹⁸⁾し、ここに血縁の斎王が仕えるという卓抜な仕組みを発案したのである。卑弥呼型巫女(皇女)ひとりでもなく、天皇だけでもなく、王と皇女(=巫女)を合せた聖俗合体¹⁹⁾という新制度なのだ。天皇と斎王とをシンクロさせることにより、群雄の中から初代天皇(崇神=「所知初国」ハツクニシラス)が生まれた、とみるからである。

この斎王の行列が、少なくとも4世紀初頭ごろから9世紀末ごろ(鈴鹿峠の開通)までの500年間、往復でカフト谷を通過したであろうということが、歴史資料からは知れないカフトの古代にあった重要な出来事なのだ。

ルートとカフト 古代の政権地は幾度も遷しているが、上古の都は、ほとんどが三輪山の麓あたりから飛鳥にかけてにあり、その後、平城京へと北上する。これらの時代の「群行」は、上古には、初瀬川を遡行し、名張から伊賀盆地へと北上し、^{つむえ}積殖(現・^{つげ}柘植)にいたり、その先は、カフトを越えて古厩におりて、そこから伊勢へと南下する。奈良時代になると、現・木津川市を目指して北上し、そこから東へ転じて、同じく柘植に至り、カフトを越える。のち、平安京へ遷都になると、鈴鹿峠ルートが開発されるまでは、琵琶湖南端を経て草津から東南に折れて、杣街道(ほぼ野洲川沿い)の甲賀を抜けて柘植へ出て、やはりカフトを通ったと推定される²⁰⁾。ただし、これには、平安時代前半を除いては、斎王はカフト谷以外のルートを用いたとする説もある²¹⁾。しかし、ここでは、カフトルートが、最も自然なルートだと見ておく。カフトが鈴鹿山脈と布引山地の狭間にあり、東西横断には山岳部分の最も狭まった箇所、東西幅が10キロ程度しかないからである。実際、このルートなら、カフト谷部分にある山越えは距離的には短くすむ。カフト越えが、古代大和と、鈴鹿を経由して東国とをつなぐ官道として認知されていたのも理由あることだと素直に考えておきたい。

さて、このルートの場合、積殖の集落あたりから山へ入ることになる。山道は、まず「一ツ家」に至る。峠まで来たら山中のルートをとって、「中(北)在家」あたりに下りて、「板屋」を通り、再びカフト川の右岸の山中に入り、ここを「梶ヶ坂」

15) 「名勝として記すべきものなし」『鈴鹿郷土誌』(鈴鹿郡教育委員会)大正4年

16) 三重県明和町で広大な遺構が発掘されている。

17) 文末[補注1]

18) 三橋健博士は、いくらか留保をつけつつも「西暦297年」と推測している。『伊勢神宮』(朝日新聞出版)。

19) 「天照大神の伊勢遷座は(…)大和の王権の全国支配へのあらたな歩みを象徴する」。西郷信綱『古事記の世界』岩波新書

20) 「奈良時代には、都から東への幹線道路は、大和から木津川を遡り、伊賀国を経て加太の峠を越え伊勢に入る、一般に大和街道と呼ばれる道筋で、おそらく伊勢神宮に下る奈良時代の斎王たちも、この道を通ったと思われます」(三重県文化振興課県史編さん班)。

21) 文末[補注2]

で降りて、川沿いに「市場」に至る。そのあたり(「向井」か?)か、もう少し先(「金場」あたりか?)まで行って、再び東南方向へ山越えをして「越川」に下り、「久我」を通り、「古厩」へ抜けるルートが想定される。

そこで、斎王の通行のことを考えてみよう。カフトの溪谷には、禊を行うための清流が十分にある。少なくとも 9 世紀末ごろには柘植に頓宮^{とんぐう}があったらしいので、こちらの谷道には、休息所のような設備はあったかもしれない。この造営に必要な木材も豊富にあるという条件が整っていた。

頓宮が、古代のカフトにもつくられたかは不明だが、そもそもは、頓宮は、その名が示すとおり「急ごしらえの仮の宮」(「斎宮歴史博物館」の用語説明)であり、諸辞典でも「にわかに造った仮の施設」(三省堂大辞林など)である。要するに、掘立小屋だが、天皇・斎王のそれは頓宮と称された。ただし、獵師小屋などと異なるのは、斎王が休息あるいは宿泊したあとにはすぐ取り壊されたらしい。また、時代が下るほど大掛かりになり百人単位の人の宿泊に供したらしい。

カフトは一日のうちに通り抜けることは可能なことは述べた。しかし、さすが山道部分もあるので、一気に通り抜けると言うことはまずなかっただろう。途中で、休憩や禊や祭祀を執り行ったとみるほうが自然である。とくに肅々と歩む女性中心の旅団であることに注意が必要である。非常事態(壬申の乱の時の大海人皇子、後世の木曾義仲追討の源義経、本能寺の変時の徳川家康の遁走など)の武人の強行軍とは異なるということは〔補注 2〕で述べた通りである。

前置きが長くなったが、これから示したいことが肝要である。斎王の通過ルート上にあるカフトの谷筋に、決定的な刻印が残っていないか、どのようなカフトの過去が見えてくるかというという探究なのである。

なお、「群行」という用語はここでは便宜的に使用するもので、カフトを通過していたころには、11 世紀あたりの記録から想像されるような平安絵巻のような容儀壮麗な大行進となる「群行」ではもちろんなかった。おそらく、それは、むしろ原始的、秘術的な雰囲気漂わす女性中心の小さな一団であっただろう。

字名(その1) 「一ツ家」、「板屋」、「板ヶ谷」、「市場」、「一ノ木戸」、「越川」

字名にみるカフト さて、そこで、カフトの谷筋で一行が休息をしたり、溪流での禊を行ったりしたとするなら、そのことを示すようななんらかの痕跡が残っていないだろうか、このあたりからカフトの古層に下ってみたいと思う。見出しにか

かげたこれらの字名^{あざ}をひとつのグループとみて、以下考察を加えてみたい。

「一ツ家」 群行は、柘植の集落を抜けて、岡鼻^{おかひしな}(おそらく岡端、つまり登山口)という場所からカフトの山へ入ることになる。「大山」越えである。上り詰めると「一ツ家^{あざ}」という集落に到る。ここは、上で述べたように最近まで加太村に属していた所である。この地名の検討から始めよう。この字名^{あざ}22)は、斎王がそこで禊などをしたことを示す地名の名残でないか、という想像なのである。一ツ家(『三國地志』では「一ツ屋」)は、往時は、ヒツヤでなく、イツヤではなかったか。斎屋(イツヤ)の音が、いつの間にか、「一ツ家」にあてられ、読みもヒツヤと変化したのではないか。近くに大杣池^{おおそまいけ}がある。杣は植林地で、樹木は宮材^{みやき}かもしれない。池は禊の場になったであろう。

ただ、頓宮や禊に係わる構造物や用具や、場所ですら考古学的発掘の成果からこれを立証することは難しいだろう。しかし、斎王通過の物的痕跡は抹消されても、上古、そこに住む人によって記憶として継承され、それが地名として残ったということは考えられる。しかも、あとで述べるように、禊を行う一行の通過は繰り返されたはずだ。もちろん、その間隔は一年に一度ということはないにしても、均せば 5 年か 10 年に一度はあっただろう。カフトの溪谷に住む人にとっては、親子代々、子々孫々伝えるべき重大行事なのだ。最大の時間幅で見積もれば 4 世紀から 9 世紀末までの数百年のあいだ、この谷でこの行事は繰返された。この集積はそうとう鮮烈な集団記憶となり、これが地名という痕跡となったと考えたいのである。

ただし、群行のつど、滞留したり、禊を実施する場所が変わる(変える)とすると、カフトの谷においてその痕跡を残す地名が「一ツ家」の他にも残っている可能性がここに浮上する。

22) 以下、カフトにおける字名・小字名については『関町史』の付図「関町小字図」(昭和52年)を参照した。

「板屋」一ツ家から加太川の源流のひとつとなる大岡寺川²³⁾溪谷に沿って山中の厳しいルートをとって加太川との合流点に到り、さらに谷筋(難所なので迂回や渡河を繰り返したろう)を先に進んでいくと、「板屋」という字名の場所に至る。明治以降、村役場や駐在所、郵便局、小学校がおかれた所である(現在も小学校などいくつかは現存)。実は、ここもその一つではないか、と考えるのである。イタヤに板屋という文字をあてるとは後世に偶さかそうだったと思えるふしがあるのだ²⁴⁾。むしろ、イタヤは、音韻的に齋屋(家)の転訛²⁵⁾という可能性がすくなく想定できる。いうまでもなく、この地勢も禊や祭祀場、休息所の場にふさわしい。以下、齋王群行とすこし話しがそれる。

熊本県球磨郡「五木」村のイツキは、齋(イツキ)に関係がないだろうか。古代の祭祀場にちなんだ名前である。実は、その周辺には、「板木谷」とか「一の股谷」という小字があるのだ。これらの「板(イタ)」や「一(イチ)」との関係がそれを示唆していないだろうか。また、福岡県筑紫郡那珂川町には、「市ノ瀬」という大字があるが、ここから「板谷」峠を越えた隣の町名が福岡市早良区「板屋」で、両者のあいだにある山が「五ヶ山」(ゴカサン=イツケヤマ)という例も気になる。また、全国には「板谷」地名がきわめて多い。「板+谷」の中のいくらかは、材木と関係のない「齋」に関係があるのではないだろうか。千葉県夷隅郡大多喜町「板谷」に隣接する字名は「市川」であるなど、「イチ」と「イタ」の組み合わせが全国に散見される。これらの多くは古形が保たれやすい僻村に見られることも注目してよい。

「板ヶ谷」カフトの道が続けよう。つぎに、「峠」という字名の残る小山を越えて「梶ヶ坂」に下る。この斜面にそって南には、再び、イツキの谷を思わせる「板ヶ谷」という字名が見出される。現在の南山林道と名阪国道とが交差するあたりである。

「市場」こうみると、この道の先にある「市場」という字名も、そのままイチバ、イツバ、すなわち「齋場」であった可能性があるように思える。市場という名前は、簡単に交易の場と決めつけられない背景があるからである²⁶⁾。

ここは 1896(明治 29)年に関西鉄道の「加太駅」のおかれた場所である。加太川に牛谷川が注ぐ地点でもあり、溪流が流れているので禊の場所としての条件は十分だ。本稿では、齋王の通過・滞在にかかわるイツキをカフトの谷で探求している。しかし、上の例で示したように、古代には、丘、岩、大樹、川、泉など多くの場(を対象)に祭祀や呪術、祓いが行われ、これを「イツキ」と称していたと思われる。齋王が禊をしたり一時的に滞在したりする習俗は、むしろ古代日本に先行的に広く流布していた女性(巫女・ミコ・御子・神子)による祭祀行為一般が、国家によって取り入れられ、儀式化したものだと思える方が自然だからだ。

そこで、ふたたび寄り道になるが、交易場が成立しそうな山間や僻村に「市場」という地名が、現在でも全国に約 250 ヲ所は見いだせるということにも、もう少し注目したい。

²³⁾ この川の名前の由来については、p.16 の注 50 参照。

²⁴⁾ 「板屋或一ツ家ト云」(勢陽五鈴遺響鈴鹿郡之四)とあり、また『勢陽雜記』では「北屋」と表記してあるという。「板屋」という表記は不確定だといえよう。

²⁵⁾ 柳田國男は、イタコの語源は齋(イツキ)がもとになった市子(イチコ)で、その地方的転訛がイタコ、エチコ、イタカ、イチコ、モリコであろうと述べている。齋(イツキ)は「イチ」、「イタ」、「エチ」に転訛すると推定している。('イタカ'及び'サンカ')。

²⁶⁾ 上の柳田説に加えて次の説も紹介したい。西村真次は、「國語イチ(市)の語原については色々の説があるが、私は『齋』を意味するイツキの転訛したもので、それには ituki→itui→iti→ichi の如き過程が経られたと想ふ。これらの言語學的証拠から云へば、市の発生は主として呪的・宗教的動因(Magico-religious factor)に基づいてゐるとみることが出来る。これらの神話や史實から推すと、河原、山麓、原野、海邊などが會議、裁判、儀禮などの場所として選ばれたことに疑ひがない」と述べる(『日本古代市場の研究』早稲田大学 1931 年)。また大野晋他編『古語辞典』(岩波)では、「イツ」(嚴、稜威)は、天皇が本来持つ(中略)威力」としたうえで「イチシロシ」などの「イチはイツの転訛」という説明をしている。イツ=イチである。もちろん、事実として、律令の条文には「市」を明確に交易の場として扱っている部分があり(「関市令」中の「市恒条」)、それは、養老令から遡及して再構築された大宝令にもあったことがほぼ推測され、つまり7世紀末には「市」は、交易の意味に一般化していたのだろう。

こういう「市場」の中で、興味あるのは、千葉県印旛村(現・印西市)の岩戸という集落に現存する「市場」という小字^{こあざ}である。市場の隣の小字は「伊付(イツキ)」で、斎(イツキ)の表記変化したものと解釈したくなる。この「市場」は、印旛沼(もとは利根川水系であり氾濫原でもあった)を臨む比高約 20 メートルの台地上にあって、周辺に多い龍神信仰となんらかの類縁があるのかもしれない。すなわち、印旛沼の氾濫、洪水の水利コントロールを司る巫女や占術師などの祭祀場である。この「市場」地区の中央には、現在、西福寺という寺があり、かつ、ここが中世か戦国時代に消えた岩戸城の城址だという。こういう村落の構造は、カフトにおける、鹿伏兎城館と神福寺とその所在地名「市場」との関係に重なるものを感じさせる。印旛沼と同様に、水域地形にある徳島県の吉野川北岸にも「阿波市市場(イチバ)町伊月(イツキ)」(元・阿波郡市場町大字伊月)という地名もあるが、これなども示唆的である。

このように、潔斎をしてから神事が行われたらしい古代の斎場の通俗的な呼び名が後世にまで地名として残ることはそう多くないとはいえ、かえって僻村ほど、外部からの変化にさらされる度合いが少なく、古代の実態は忘却されても、呼び名の音は残り、これが後世に分かりやすい「市場」という漢字表記に充てられたり、イツキの意味が忘却され、伊付、伊月、五木、厳、そして、やや変形した板付などがあてられたのではないだろうか。加太「市場」は、斎王の禊に先行した、あるいは並行する古代祭祀場かもしれない²⁷⁾。カフトの谷を東へ出た所にある「新道岩陰遺跡」との関係や、市場からほぼ正面に聳える錫杖ヶ岳の雨乞い神事とのつながりも考慮に入れることができるかもしれない。

閑話休題。「市場」の少し先、現在の関西本線の坊谷トンネルと金場トンネルの間あたりには「一ノ木戸」という小字^{いちのきど}^{こあざ}²⁸⁾がある。これもイツキド(斎処)であった可能性をうかがわせる地名である。とくに、ここが笹ヶ平古墳の所在地に隣接していることを考えると、古代の祭祀場とのつながりを想像してしまう。

この古代大和街道は、「市場」から先、現在の関へ抜けるには、少なくとも、現在の国道 25 号線そのままではなく、山越えのルート(細部に諸説はあるが)であったと推定されている²⁹⁾。その中で地形的に可能性のあるのは、加太川をどこかの地点で右岸に渡り、「向井」から山越えするか、渡河せずそのまま溪谷沿いの崖道を「金場」までたどり着き、ここで渡河し、南へ向かって溪谷を遡行するものである。

「越川」このルートは、越川^{えちがわ}^{あざ}という字名をもつ集落に到る。そこは、現在は亀山市関町越川であるが、平成 17(2005)年までは、関町加太越川であった(加太小学校の分教場も明治 24 年以来置かれていた)。この越川は、エチガワと読まれるが、これもイチガワの転訛、すなわちイツ・カハであった可能性がある(全国に多い「市川」とも通じる地名か)。イツキの行われた川という由来の痕跡であったかもしれない。

イチを探ると このように、カフトの谷筋には、「斎(イツキ)」からの転訛を推定させる「一ツ家」、「板屋」、「板ヶ谷」、「市場」、「一ノ木戸」、「越川」という地名が群行ルート上に並んでいる。こういう地名の連続は偶然なのだろうか。漢字の字面から、単純にその由来を、一軒家があったから、あるいは柗植から一番初めの家があったから「一ツ家」だとか、板葺の家屋であったので、あるいは木材加工で「板」を作ったから「板屋」だとか、街道の賑わいで「市場」が成立したと説明するのは、わかりやすいが、再検討の余地はないのだろうか。

群行ルートとして推定されている道筋上のイチは、実は、カフト谷を出た先でも、いくつか見出される。亀山市関町市ノ瀬(イチノセ)・市瀬(イチセ)、市ヶ坂(イチガサカ)町。関からは南へ、後世の伊勢別街道周辺に入るが、その安

²⁷⁾「市場遺跡」(三重県埋蔵文化財センターによる発掘)は、中世遺跡(15 世紀後半から 16 世紀)とされ、鹿伏兎氏の居館ではないかと推測されている。しかし、気になるのはここから出土した「1300 点を超える大量の土師器小皿・皿」である。これは日常食器なのか。カワラケは祭祀に用いられたという可能性はないだろうか。また、この発掘地点の南の水田には「ミカド」という音の字名が伝わる。これを後世(江戸時代『加太越奈良道見取絵図』)では「御門」と表記しているが、それを根拠に鹿伏兎氏の居館跡を想定するのは無理がないか。朝廷を表す換喩語ミカドを地侍の屋敷門に使用するだろうか。「ゴモン」ならありえるだろうが。ただし、これが神事の祭祀用の象徴的な入り口という意味なら、かすかにあり得るような気がする。「延喜式」に記載されている忌部(後出)の行方ミカドホカヒ(「御門祭」という神事や「御門神八座」などとの連想で行われた民間の呪術祭祀跡という可能性を思うからである。つまり、この場所が、古代祭祀を何らかの意味で継承・反映していなかっただろうか、ということである。

²⁸⁾「一ノ城戸」とも表記し、鹿伏兎城の防塞とする解釈があるが、カフトには不釣り合い(大げさ)な名称ではないだろうか。

²⁹⁾「亀山歴博」

濃川右岸にある「市場」(イチバ)(津市芸濃町雲林院)、市村(イチムラ)駅³⁰⁾、さらに進んで、松阪市の「市場庄町」(イチバシヨウマチ)、津市一志(イチシ)町(村)、伊勢市の「古市」(フルイチ)町、「一志」(イチシ)町、「一之木」(イチノキ)町、「一字田」(イチウダ)町など、気になる地名が群行ルート上に並んでいるが、ここでは考察の対象としない。

いうまでもなく、イチがすべて「斎」とかかわりがあったということを主張するものではない。しかし、前にもふれたが、私は、これら「斎」(イツキ)を偲ばせる地名がカフトに数多くこんにちまで残っているのを不思議に思い、上代のイツキという古習俗の残滓が根強く共同体の(無意識的な)記憶となっているのではないかと、ということを指摘したいのだ。

まえに述べたように、カフトにおいては、中世に入る前に地政学的に「凍結」が起こった。イツキは、カフトのような孤立した谷では卓越して特殊な習俗だったため、人々の意識の底に強烈に沈潜をした。重要なのは、その後にこの集団記憶に上書きがなされるような出来事がこの集落においては起こらなかったという点である。

「変化の凍結」というのは、この集落の突然の「無意味化」に伴う過去の保存でもある。もちろんカフト谷の道が、先ほど述べたように鈴鹿の峠道の開鑿(認定)に伴い、唐突に官道でなくなったことに由来するが、カフト以外の街道筋と比較して、ここが地形的にそうしたような隠谷(孤絶ではなかったが)であったことも関係する。

転訛 しかし、上にあげた地名が、イツキ由来の地名だと推測できても、それがカフトの地区ごとに違う文字に転じた理由は考えてみる必要はあろう。考えられるのは、イツキそのものの概念がもつ高度な抽象性や多義性にその理由がありそうだ。イツキは、祭祀行為も場所も人間も対象も意味する。しかも、なお“何”という具体性がない。とくに山間の民がこのコトバを受け止める場合、実体を理解できなかった可能性が十分ある。じつは、都においてすら「斎」(イツキ)という言葉は、中古には非日常語となっていて、「慈」(イツクシム)という意味に矮小化していった。まして俗里では、ただ音のイメージだけが揺れ幅をもって伝承されてきた。当然、充てるべき文字も不明で、そこで、地理的な障壁もあり自律的な各「地区」では、各々独自の表記を、異なる状況で、異なる時にいつしかもつようになったのだろう。いずれにしても、イツキという共通の“体験”は、こういう形で残ったと考えたい。

3 斎王と谷筋の人々

斎王通過の頻度 説明の順序としては逆になるが、斎王は、分かっているだけで伝承時代に 9 人、飛鳥時代に 7 人、奈良時代に 7 人、平安時代の鈴鹿峠開通(886 年)前に 11 人、以後に 33 人、鎌倉時代と南北朝時代に 9 人選ばれている。この中で、カフトを通った可能性があるのは、いうまでもなく鈴鹿峠開通以前の時代の人たちである。

実際は、斎王に選ばれても群行をしなかった皇女も多少いたのだが、単純に数えると、伝承時代の記録もカウントして、群行は、復路を含めれば少なくとも 68 回程度はカフト溪谷を通ったことになる。しかし、私は、実数はこれよりそうとう多い可能性³¹⁾を想定する。その場合のざっとした数は 110 回となる。

ところで、よく知られる「宇佐の使」は、聖武天皇の 737 年以降に始まった習俗で、天皇の即位や国事に重要なことが生じた場合に宇佐八幡へ派遣される勅使である。この慣例は鎌倉末期まで続き、その累計数は二百数十回に及ぶという。こういう慣例からみれば、これより早くに始まった斎王群行に関しても、奉幣使や伊勢使のような官命を帯びた人々も、幾度もカフトを通過し、伊勢を往復することがあったのではないかと想像も膨らむ。その都度、カフト谷の住人が、受け継いだ様式をもって接遇をしたと考えるのは自然なことだと思われる。

受け容れ さて、祭祀を兼ねた一時的な施設は、同じ場所で設営されることは一般に避けられる傾向があったことは先に述べた。しかし、カフトの谷筋では、おのずと地理的な制約でその場所が限られ、郷内村(現在の加太でい

³⁰⁾「安濃郡に設置された”市村駅”については確認されていないものの、津市殿村・野田付近が有力な説として挙げられている」(「惣作遺跡発掘調査報告」三重県埋蔵文化センター、2002 年所収:岡田登「伊勢國市村駅所在地考」(「皇學館論叢」第 13 巻第 16 号 1980 年)

³¹⁾崇神天皇から弘文天皇までの 30 代の内で、斎王名が知れるのは 9 人しかいない。しかし、それ以外の天皇が(その制度が明示的に整備されなくても)、上で詳述したように、斎王は天皇制と併せ鏡である以上、むしろ古代ほど斎王選出が必須だったとみるほうが自然だからだ。そこで、これをカウントするなら、斎王のカフト通過(往復)の可能性は最大見積もると 110 回でいどとなる。

ば「区」)を変えたとしても、前回は設営した近辺に、繰り返し斎王の滞在した仮屋が設営されていたと考えてもよいだろう(伊勢神宮の遷宮は隣地に交替を繰り返すが、これでも穢れは改まるとする)。

そうすると、ここで、考えなくてはならないのは、かならずや、この谷筋には斎王通過という国家的祭祀の受け入れを担いさまざまなアレンジをした集団がいたはずだということである。

実際に即しての斎王の旅を考えれば、突如、ある地点に到着し、その場で祭祀場を設営したり、随行員たちの休息する建物や飲食を調達することはありえない。都から通達や先触れがあつて、これを受けて、事前に準備をして一行の到来に備えることが行われていた。後世(律令時代以降)には国司を通しての指示がそれを行い、平安時代も熟すると、^{くにさかい}国堺に国司が迎え、祭祀が行なわれるという煩雑で形式的な“建前”³²⁾があつたらしいが、実際には、現地で経験の豊富な専門集団が一行の受け入れ、設営、通過を準備していたと考えなくてはならない。

カフトの溪谷の民は長い時代を通じて群行のたびにこれらを引き受けた。その度数も決して少なくなかった。当時の寿命を 50 年とするなら、カフトの民は平均すれば生涯に 5 回から 10 回程度はこの体験をもつことになるのである。この奉斎行事は、上代に人口稠密でない山峡の集落に生活する人々に鮮烈な印象を残しただろう。群行の通過以外の日常が、ささやかな耕作とか山林での厳しい作業であっただけに、カフトの民にとって、この日常・非日常の落差のインパクトは、ひらけた平野の人々のそれとおそらく比較にならないぐらい大きかったと思われる。

それで思いつくのは、(時代も動機も全く異なるが)「八瀬童子」や東大寺の「童子」などの存在である。前者は京都の八瀬郷に住み日常は山林業などをして生計をたてているいわゆる^{やまあい}杣伐夫なのだが、天皇の崩御に際して、その葬列に参加し、棺を担ぐという特別な慣習を長年継承してきた集団である。いわば閉じられた山間で、祭祀儀礼を受け継ぎつつ、何年か、何十年かに一度しかない国家的行事に備えて生活している民である。後者は、東大寺二月堂で天平時代(752 年)から綿々^{しゅにえ}とつづく修二会(お水取り)を支える人々であり、籠松明の儀式の見せ場を演出する。彼らは僧ではない。儀式のときだけ登場する俗人を「待機集団」と仮に呼ぶなら、古代のカフトの集落の人々は、まさしく待機集団だったのだろう。

川俣県造と川俣神社

差配する人 当然、つぎに考えなくてはならないのが、この群行の通過を実際に差配するなんらかの統率者の存在である。おそらく、その長は、^{おさ}武力や財力を持った豪族というようなものでなかっただろう。なぜなら、この生産性の低い山峡に、軍事力や収税権を持った支配者が存在しても、そこから得る実利性が薄いからである。むしろカフトは政治的空白地であつた可能性が高い。『和名類聚抄』にカフトの記載がないのもその理由からだと思われる。何らかの支配がこの谷に及んでいたとしても、それは谷の外の奉斎氏族のようなものが目の端にいていた程度でなかったか。この人物が、斎王の通過を、都度、差配することになっていて、当然その人物の家柄は代々傳承されていただろう。

律令下で差配 この役割を担う族長は、律令制が始まると、祭祀の統率の便宜のために、当然、この谷筋全体を斎王の群行に奉仕する祭祀集団が住まう谷という大義をたて、「^{じんふこ}神封戸」として抱え込んだと考えられる。神封戸に指定されると、人々は神事や祭事のための労役提供と費用負担を負うことになるのだが、一方では半免租地となる。

神封戸は、後の検討で大切な語ともなるのだが、これは、^{ふこ}封戸の一つである。封戸とは、一般に律令制下で高官や功労者に与えられる収税対象になる人民であるが、神社がその権利を持つばあい神封戸という。封戸に指定された住民は租税を神社に奉納し、祭事に労力などを提供した。ただ、大宝令や養老令に明示的な規定があるわけではない。現場での運用でのみ用いられた概念だったようだ³³⁾。ローカルな使用、あるいは私的使用にとどまり、そのせいで、これとほとんど同義の「神戸」と異なり、周知されないうちに消えたようである。私は、これはあとで述べる「県造」がロー

³²⁾『延喜式』

³³⁾『国史大辞典 7』吉川弘文館、1986 年

カルな名称であることと関係があるとみている。実証できる史料は持たないのだが、三重県と愛知県あたりでのみ、しかも一時的に用いられたようだ。「神封戸」と書く地名が残存していないことからの類推である。

川俣氏 さて、このような施策と差配を行った人物として、すぐさま思い浮かぶのが、川(河)俣と称する「^{あがたみやつこ}県造」の存在である。いうまでもなく、カフトの谷の中心的神社が「川俣神社」であることから想起できる人名である。

この神社の名になっている川俣というのは、おそらくこのあたりを支配していたという川俣県造からくるといわれている。実在が史料の中で言及程度にしか散見されない人物なのだが、興味ある記述が倭姫の巡行伝承にある。

「^{カハマタノアガタミヤツコ}河俣県造らの遠祖・大比古、鈴鹿小山宮に坐す天照坐皇大神に神御田・神戸を献上した」という記述である³⁴⁾。「河俣」と「大比古」と「天照」と「神戸」が、この短い文章に圧縮されて見られるのである。

さきに、「県造」を説明しておこう。これは、一般にいう「^{あがたぬし}県主」に似ているが、同じではない。主に伊勢地方と美濃にみられるローカルな身分名³⁵⁾で、伊勢神宮(あるいはその原始的な形)と、直接あるいは間接的に、かかわりがあり、祭祀的な基盤確立に協力する特別な族長であったと考えられる。もちろん、県造は川俣氏以外にも、この地方には安濃や飯高などにもいた。どうやら行政区分としての「県」とは関係がないと思われる。同時に、姓^{かいはね}としてではなく、たんなる名として用いられていたものと思われる。また、そうだからこそ、この川俣県造が、正史の政治的話柄にまったく登場しないという事実も納得できる。

川俣と伊勢神宮 上記の伝承で、天照大神を祀るための(伊勢)神宮を定める「遍歴」を倭姫が行っている点、また、大毘(比)古が、川俣県造の先祖という記述、さらに大毘古が神戸をささげたという諸点にすこし注目してみたい。

上に述べたように、カフトにある唯一³⁶⁾と言ってもさしつかえない神社がさきにあげた川俣神社である。

川俣氏を祀る神社がなぜカフトにあるのか。

大毘古命^{みこと}は、孝元天皇の長男(崇神天皇のおじ)ということであり、崇神天皇時代の四道將軍の一人という“伝説上”の人物だとされてきた。ところが、この命^{みこと}が実在した可能性が歴史的にみえてきたのである³⁷⁾。そのことにより、「倭姫」伝承話にみられる寄進行為で言及される川俣県造という人物が、天皇家と天照信仰とのつながりを実体化させる制度に組み込まれた系譜にある子孫だということが間接的に示されていることになる。大毘古が四道將軍として、大和王朝支配地域の策定にかかわる有力者であり、そのことで、その子孫と称する川俣県造の位置づけもみえる。図式的いうなら、大和王朝一崇神天皇一大毘古一(伊勢神宮)一川俣一(カフト)一神封戸一斎王群行一川俣神社という、聖俗に係わる糸がそうとう現実味を帯びてきたといえるのである。

ところで、川俣が大毘古の子孫であるというのは、大毘古の長子の名前から類推できるのではないかと考える。大毘古命の長子は、古事記の記述では、その名を「建沼河別」(『日本書紀』では武渟川別)(タケヌナカハワケ)という。この「河別」の部分の同義語は「河俣」であるといえよう。ともに、川の分岐点を指すことばであるからだ。すなわち、カハマタは、「河別」の別義だとみられなくもない。いうまでもなく、「別」(ワケ)とは、その語源が明確ではないものの、地方権力者が(皇室の子孫であるとの権威づけのため)名乗った称号だともいわれ、姓^{かいはね}のように使われたらしい。しかし、これが出現するのは4世紀末からせいぜい5世紀だけで、この名を地方にちらばる子孫たちが累代継承するうちに、姓の“威光”も失われ、たんなる呼び名になり、そこから日常的に理解しやすい呼び名に変化していったという推量も

34)『皇太神宮儀式帳』(「亀山歴博」より孫引)。なお、この『皇太神宮儀式帳』は遅くとも、編者の延暦23年(804)までの認識なので、むしろ9世紀というより、8世紀の知見(伝承に基づく創作?)とみることができる。そしてこれは「天照大神を豊鍬入姫命より離ちて、倭姫命に託(つ)けたまふ。ここに倭姫命、大神を鎮め坐させむ処を求(ま)ぎて、菟田(うだ)の笹幡(ささはた)に詣(いた)り、更に還りて近江国に入りて、東のかた美濃を廻り、伊勢国に到りたまふ」という『日本書紀』の「垂仁紀」の記述を後世に膨らませたものだといえる。さらに「大和姫命世記」が鎌倉時代の「創作」だとして一顧だにしない立場と異なり、私は、せめてその表象は、読み解けるだろうという立場に立つ。

35)ミヤツコは「朝廷の職業集団(部)を統率する一族などに与えられる姓で、その地位はあまり高くない」(三浦佑之『口語訳古事記』(文藝春秋社)の語釈)。

36)ただし、明治5年の加太村の記録によると、神社27、寺9が存在している(『関町町史』)。しかし、神社の大半が愛宕社が浅間社という山岳関係もしくは稲荷、八幡など、おもに中世以降に農民大衆信仰で伝播したもの。これらはすべて、江戸期から明治期にかけて川俣神社の摂社にされている。現在三重県神社庁に記載されている加太における神社は川俣だけである。ちなみに寺は、7つとも現存する。

許される気がする³⁸⁾。そういう人物の本拠地が、「鈴鹿川と安楽川の合流点(あるいは、安楽川、八島川、御幣川の合流点)辺り」(《亀山歴博》)であれば、地理的印象と重ねて「川俣」を人々は自然に納得していたのかもしれない。

いずれにしても四道将軍の一人としての建沼河別命の担当地が「東海」であったことや、天皇から受けた特命が「神祇祭祀のこと」であることも考えあわせると、伊勢神宮と川俣県造(あるいは一族から分立した子孫)とのつながりは、それがどの程度であったのかは別として、それほど牽強付会ともいえないような気がする。

この前提に立つなら、倭姫命の遍歴物語に、川俣氏が登場するのもあながち荒唐無稽な事績とはいえないことになる。つまり、この部分は川俣に関してはなんらかの「事実」を伝えていると言えるだろう。

川俣の県「造」における「ミヤツコ」は、宮に仕える奴^{やつこ} = 宮廷+神官からくる名称で、上で述べたように、とくに後世では、多分に自称という感じもする。伊勢神宮とのつながりを意図的に買って出たのかもしれない。その職務から、また、目立たない地域(とくに伊勢神郡の指定外にあつて)を差配したことからも、私的なボランティア的要素も感じる。つまり、倭姫の巡行というのは、伊勢神宮のための、私的な支援・維持の篤志家をリクルートする旅の一面があつたと考えれば、その点でも川俣氏の先祖がこの役目を負ったのは、それほど矛盾したことではないだろう。

しかし、繰り返すが、川俣県造の支配形態は、どうみても政治的でもなければ経済的でもない。むしろ「斎主」(神主、神官)という色合いが濃かったのではなかろうか。

いずれにしても『皇太神宮儀式帳』で言及される「大毘古」や子孫と称する川俣県造の流れをくむ一族が代々この鈴鹿あたりに実在していて、伊勢神宮に関与し、斎王の通過にかかわり、このために律令時代以降はカフトを「神封戸」に指定をしたという筋道は見えてくるのである。

川俣神社 カフトにある川俣神社は、おそらくこの地域を支配した川俣一族の祖神を祭った神社で、いつの時代か祭神の名前でなく、川俣の名前で呼ばれるようになったものであろう。

ただし、川俣神社というのは、周知のようにカフトだけにあるわけではない。川俣神社は、「延喜式神名帳」(967年)に鈴鹿郡の神社としての記載はあるのだが³⁹⁾、その所在地は「鈴鹿郡」としか記されていないので、この郡のどの郷にあったかということには定説はない。このため、現在、六つの川俣神社がその候補となるとされている。

(1) 亀山市加太板屋 (2) 鈴鹿市和泉町 (3) 鈴鹿市西富田町 (4) 鈴鹿市中富田町 (5) 鈴鹿市庄野町 (6) 鈴鹿市平田本町 である。

	大毘古	天照大神	豊受姫	神武	仁徳	応神	大国主	市杵島比売	多紀理毘売	玉依毘売	神功皇后	崇徳	猿田彦	健甕須佐之男
(1)加太板屋	●	○	○	○	○	○								
(2)和泉町							●	○						
(3)西富田町					○	○	○		●	○	○	○		
(4)中富田	●	○								○			○	○
(5)庄野町*	○				○		○	○		○	○			○
(6)平田本町		○				●	○						○	○

●主祭神 ○配神(合祀) * 主祭神と配神の区分が不明

その川俣神社の祭神と配神(合祀を含む)の主なものを一覧にしたのが左図である。ただし、先に断っておかなくてはならないのは、神社は、村落の合併やそのほかさまざまな理由で、歴史的に同一の祭神を一貫して祀っているとは限らない。しかし、そうはいっても、その近辺を含む共同体としては、おおよそどういう神を中心にして祀っているのかという傾向程度はわかる。

上記6社のうちで、川俣県造の祖・大毘古命を祭神としている神社は、加太板屋、中富田町、庄野町の川俣神社である。また、他の神社は、もとは別名(八王子神社とか貴船神社)だったという。もちろん、大毘古命が祀られていないから川俣神社としては正統でないということはいえない。とはいえ、神社が、多くは氏神であるという風習からみれば、祖神が閑却されたり、「大国主命」や「健甕須佐之男」が入り込んだりしている地域に比べて、カフトには、

37) 5 世紀の稲荷山古墳の出土鉄剣の銘文の解読(1978 年)により「意富比埴」(オホヒコ)の名が確認された。
38) 「和氣」(ワケ)、「脇」(ワキ)、「分部」(ワケベ)という姓や地名は「別」(ワケ)から音転訛したものではないかと思われる。
39) 『延喜式』第 9 巻・第 10 巻「神名帳上下」

配神秩序への執着が感じられる。加太においては、祖神ならびに大神宮からの軸がぶれていないのである。上の表で見て取れるように、あきらかにカフトだけ、主祭神や配神の分布が、他の5社と異なる図柄を示しているのだ。

また、カフト以外の5つの川俣神社がすべて現・鈴鹿市域の平野部にあるのにたいして、カフトのそれのみ隔離した山中にある。カフトという閉域共同体の中心的な神社であり続けたということを考えると、祭礼の対象としての大毘古にたいしては濃密な思い(意識的か無意識かは別として)をもつ理由があり、このことが外からの祀り神勧請への抵抗ともなり、それゆえ、大毘古が綿々と継承されていたと考えても不自然でないだろう。

カフトの川俣神社は、寛文8(1668)年、板屋地区に移されたもので、もとは、もうすこし南の、現・加太中在家の東端、アマタノ川の湾曲した部分の内側にあったといわれる。

このアマタノ川の語源はアガタであるといわれていると考えあわせても、カフトの人々はどこかで川俣とは、県造(アガタのミヤツコ)なのだ、という(おそらく深層的な)伝承を継承していたという証ではないだろうか。それに比べて、鈴鹿川も中流、下流となると、開放された地勢であるだけに、人や文化の交流も豊かで、時代の流れはより直接的に影響を与え、伝承の磨滅と上書きが激しく行われる。その結果、古代は埋没していく傾向にある。その点、カフトでは前に述べたように、過去のある種の「凍結」により、共同体の記憶が、基層のままに存続続けたのではなかろうか。

また、川俣神社の本貫が鈴鹿川中流周辺にあるという説⁴⁰⁾から言えば、カフトにあるそれは当然、分祠ということになる。その場合、なぜカフトのだけが、かなり西に孤立してあるのかという疑問が生じる。その一方で、なぜ、地勢の広がる伊勢湾方向(東・南・北の三方)にその信仰は広がらなかったのかという第二の疑問が生じる。これを解くのは、やはり、川俣氏は斎王の群行を専一とする奉斎氏族であり、それだからこそ、西の狭隘な谷筋であるにもかかわらずカフトこそが深甚な影響を受け、斎王群行と縁のない鈴鹿の平地では、この一族の普通の意味での先祖神あるいは氏神でいどだったと考えればかなり説明がつく⁴¹⁾。

繰り返していえば、川俣氏族は政治的には微弱な支配者ではあつたろう⁴²⁾が、時代とともに、いくつかの支族に別れ、それぞれが、政治的な関与というより、おもに奉斎氏族として、その地域の多くを神封戸(神戸)に定め、伊勢や斎宮に協力を奉げる仕事をしていたと想像されるのである。

そうなれば、「延喜式神名帳」に記載される川俣神社も、11世紀時点で、すでに分社したり、合祀したりして、複数存在していたという考えも許されるだろう。その中には、大毘古とのつながりも忘却されたか、別の祭神に上書きされてしまったのもあれば、カフトのように共同体の古形に由緒があつて、しっかり保たれたものもある、とも考えられる。

しかし、ここでは、川俣神社の鎮座する場所の比定が問題の中心ではない。

確認したかったのは、川俣県造氏族が、古い時代に鈴鹿川沿い(カフトと含む)一帯をゆるやかに差配していただろうという単純な想像である。

さらに、上でふれたように、群行のルートは、カフトの谷を出たあとは、南下する。川俣氏の影響が及ぶ「井田川・国府の近辺」あたり、つまり鈴鹿川流域は、群行ルートとは無縁となる。奉斎氏族の川俣氏族にとって、活躍できる場所は、主として、カフトの谷とそのわずかな先(せいぜい古厩の周辺)までだったということだ。その先は、安濃川流域もしくは

40) 川俣氏族の拠点とは、先にふれたように現在では鈴鹿市の安楽川と鈴鹿川の合流地点あたりでないかという説が有力である。そして、この川の股にあることが、その呼び名と関係があるということで、いまのところ、本貫は井田川・国府の近辺に比定されている。ただし、現在の亀山市の川崎町付近も古代には鈴鹿郡英多郷(あがたのさと)と呼ばれ、事実、古代(縄文時代から奈良時代まで)の大規模な複合遺跡が発掘されていることから、この英多(あがた)も川俣県造と関係があるという推定もある(「亀山歴史博」)。

41) 伊賀の国の一宮としての敢國(あへくに)神社(伊賀市一之宮)の主神が大彦命(おおひこのみこと)であることも注意しておいたほうがよいだろう。伝承では、大彦命の子孫たちはここに永住したという。一方、大彦命が祭神となるのは江戸時代中期ともいう。いずれにしても、カフトはこの神社とおおよそ20キロ離れているとはいえ、地勢的に伊賀の国との境界にあるので、子孫たちと川俣氏族とのつながりには無視できないものがある。再検証が必要ではないだろうか。

42) おそらく牧田郷(正確な範囲は不明だが)あたりに住んでいた川俣の存在が唯一文献的に確認されているのは「鈴鹿郡牧田郷戸主川俣縣造繼成戸口役茂麻呂妻川俣縣造藤繼…」(「続日本後紀」承和13(846)年)だけである。しかも、この記事は政治・行政とは無縁のグロテスクなゴシップなのである。

は、いわゆる「伊勢別街道」となり、鈴鹿郡ではなくなるからである⁴³⁾。つまり、カフトに川俣神社があるということには積極的な理由があるという根拠だと述べたのは、この点だったのだ。

普通、農村地帯のようにいわば「公的歴史」が希薄な場所では、そこに祀られる氏神は、全国に伝播している八幡、稲荷、熊野、天神、諏訪、白山などであることが大多数なのだが、カフトがあえてこれらと系統の異なる社を共同体の中心に祀る特別な理由があったことを上で解いてみた。この川俣神社は、先にあげたような“全国区的”な神社に駆逐されることなく、村の中核に長く残り、明治 40 年に神社の合祀が進められた時にも村内にあった他の「大衆的」神社（愛宕、浅間、八幡、稲荷、平野など 42 社）すべてを吸収してしまった。その内 25 社は「山の神」であった。これも、斎王通過との関係から導かれるカフトの重要な姿の一面である。

4 カフト語源解

カフトの紐帯 私は、カフトにおける集落どうしが地形的制約で谷筋ごとに分散しているのにもかかわらず、長い歴史のなかで、一村であり続けたことにいささか不思議さを感じていた。たとえば明治 22 年の町村制の施行で鈴鹿郡の村々はすべて大なり小なり合併（それによる消滅）をして姿を変えていったが、加太村のみ、単独村制を維持し、戦後、関町に吸収され、のちに亀山市となった現在ですらも、まだその基本形態が崩れていない。「村」という呼び名はなくなったが、地名としては、「亀山市加太市場」、「亀山市加太板屋」などと称し、旧来の村名+地区名を保持している。

さきに述べたように、寺は、加太の各地区にあるのにたいして、神社は川俣神社一つである。この川俣神社が、これだけ地理的に分散した村落の、いわば古代の意味づけでの紐帯をなしているようにみえてならない。

稀少地名 さて、ここからカフトという名称の由来を探る作業をしてみたい。

川俣氏族がこの山峡の集落を免租地の一種である神封戸と指定したのではないかということは、上で述べた。

先に結論をいうと、私は、カフトという呼称はこの「神封戸」（じんふこ）に由来するのではないかと推測している。この唐突なようにみえる結論に至った背景にあるのが、カフトの地名が、繰り返すが、全国に一つしかないという事実であった。つまり、稀少地名の成立には、柳田國男が述べるごとく、ある種の複雑で特殊な経緯が内包されているという点なのである。それが、いままで縷々述べてきたこととここで初めてリンクする。

伊勢神宮に奉仕する、言い換えれば天皇制の権威づけに協力する集落という意味づけがカフトになされるのは、古代に、斎王の通過を接遇する奉斎氏族支配下にはいり、「神封戸」という指定を受けたことが、地名発祥の源ではないかという推論である。この溪谷に住む人々は、おそらく、神封戸としてある種の宿命意識をもって親子代々、祭祀に携わることを行っていたのではなかろうか。カフトという場の意味づけが初めて明示的になったのは、上古からの長い習俗の果てに、初めてこの「神封戸」指定とともに生まれたと考えても不自然ではないだろう。

では、なぜ神封戸（ジンフコ）がカフトの語源であるか。

語源さまざま まず、こんにちまでで知られるいくつかの加太の語源説をいくつか簡単に紹介し記しておきたい。

(1)昔々、天皇がこの土地へ行幸された時、地元の民が鹿と兎を獲って献上した。喜ばれた天皇は、それいらいこの土地を「鹿伏兎」と呼ぶようになった。

(2)天皇が行幸のおり山中で、鹿が兎を伏せているのを見て、珍しい光景だと、「鹿伏兎」と名付けられた。

(3)義経が、木曾義仲追討のためここを通った時、この地方から味方に加わった武士が多数いたため「加太」と書くようになった（「太」は「多い」に通ずる）。

(4)山の地形が兜の形になっているから。

などである。これら民間語源説については、ここで評価をしない。

⁴³⁾ カフトを出ると、あとは奄芸（あんき）郡や安濃（あの）郡を通過することになる。（『延喜式』）。

「川太」説 現在、ひろく受け入れられている説は、「川が太い、太くなる」という「川(カハ)+太(フト)」説である。吉田東伍博士や、これに準拠した地名辞典などで紹介されているものである。

なるほど、音韻の転訛という点では納得がいく説である。しかし、問題点が多い。

1. 川が合流など、地形的要因で太くなる箇所というなら、そういう地形は、全国に幾千とあるだろう。しかし、この由来をもって、「カフト」となっている類例はない。なぜここだけカフトなのかという合理的説明を欠く。

2. 実際に加太川の流域で著しく太くなるような箇所があるのか、地図上からも、また実見でも、それと指摘できる場所が見当たらない。仮に歴史的過去にそれがあったとして、その箇所が著しく目立つ地形であるため村の名前に残したくなるほどのものであるのか。常識で考えても、加太川がその川幅を広くするのは、むしろ、カフトの谷を出て旧関町を通過するあたりから下流にわたってだろう(鈴鹿川と合流するあたりはとくに)。「川が太い」と名付ける以上は、別の箇所と比較してそう感じる人たちの認知が必要である。カフトに住む人たちが恒常的に感じるような理由が無くてはならない。また外部の者も納得するような地形的様態が必要だろう。たしかに氾濫時などには一時的に川幅が広がることはあるだろう。しかし、そのような突発事象から、自分たちの村の名を思いつくはずがない。名前のほうは日常的風景だからだ。

3. 気になるのは、川の様態の形容なら、「太い」でなくむしろ「広い」という形容詞、すなわち「広川」とか「広瀬川」となるのが普通ではないだろうか。

4. 致命的なのは語の構成法である。

①川の名は一般的に、大井川、長良川、荒川、浅川など、形容詞+川である。すなわち(語釈の正当性は措くとして)それぞれ、大きい河、長い川、荒々しい川、浅い川として理解される。「川+太い」というように、形容詞が後置されることは普通ではない。もし例外的にそうなら、何か相当な理由が必要である。くどいようだが、たとえば大川(オオ+カワ)はありえても川大(カワ+オオ)はきわめて不自然なのである。

②河川名が地名となったのではなく、河川とその流域の地形が合わさった風景が地名になったという主張なら、それは一般的に、「川+場所の形態」であろう(川崎のように)。つまり、川+地形名詞である。「川の太い^{ところ}処」と説明される陸地、それ自体が頭に描きにくい概念だが、一步ゆずってそれがありえても、季節ごとにあるいは年とともに、川幅を絶えず変えていた治水の不十分な昔の川で、恒常的に人々が「川の太い処」と概念化された地形をカフトの象徴的風景としてどこに認識したのだろうか。さらにカフトの地形のなかで、そういう特殊な場所をもって村全体の地名にしたいという意識が生まれることなどありえるだろうか。

「川俣」説 この説も有力である。江戸末期の伊勢国に関する地誌『勢陽五鈴遺響』の「鈴鹿郡巻」において述べられ、これを継承する類書において説かれているものである。それらを併せてみると、加太(村)の旧名は川俣(河俣)で、カハバタ>カバタが後世に音便でカフトに転訛し鹿伏兎や加太と書くようになった、という推論である。その「川俣」は、カフト川と中在家川(アマタノ川? 筆者注)の合流点を示し、この川俣神への信仰に由来するという⁴⁴⁾。

この説にもいくつかの疑問点がある。

1. 神社名の「川俣(カワマタ)」と、これに先行するという地形を表す「カワマタ」。一方は音が正確に残存し、他方はカフトに変形して村名となったという、まことに不可思議な現象を合理的に説明できるのだろうか。

2. 「川俣神を崇祀」するとは、何を祀るのか。河川への自然崇拝なのか? なぜ、そしてどこから祭神の大毘古と結びつくのか? 鈴鹿川沿岸にある複数の川俣神社(後述)との関係も不問に付されている。

3. カフトを流れる十以上の川「マタ」の中で、そこだけが「マタ」と卓越した理由は何なのだろうか? そこだといわれる「中在家」のマタは、現実には、長らく山の裾だった。それが中世以降に削られ、田圃の拓かれた箇所である。なぜ、このような特徴もないなんでもない箇所が、より古いカフトの歴史を超越してカフトの村名になりえたのか?

⁴⁴⁾『関町町史』

4. 一般に川俣という地名は、自然地理に由来し、原型のまま残る特質をもっている。そのことは、川又、川股、河俣、川跨などのヴァリエーションも含めれば、全国に残る「カワマタ」地名の多さでも明らかである。「川」と「分岐点」という単純な二つの鍵概念のセットで構成されている地名だからだ。その理由で「素直に」そのまま地名になり、かつ、音韻変化をこうむらない性質を持つものだ。にもかかわらず、カフトでのみ、では、なぜ「川俣」という明快な発音と表記が喪失し、カフトという奇妙な音に転化し、さらには、鹿伏兎あるいは家富唐というような複雑な文字があてられたのか。

5. 致命的なのは、音韻変化の説明である。「カハマタ」という音が「カフト」に転化するという説明はそうとう苦しい。一步ゆずって「音便の転訛」でカフトとなったとするなら、それこそ全国いたるところに「カフト」がありそうなものだ。カハマタが、カハタ(加幡、加葉田など)、カバタ(加畑、栳田、加島など)、カマタ(蒲田、鎌田、釜田、鹿又、鹿俣など)へ転訛することは十分ありえても、カフトへと転音する類例は、管見ながら知らない。

「神封戸」説 さて、ここでカフトの語源を「神封戸」に求める拙論を提示してみたい。先に詳述した、川俣県造氏族は、斎王の群行受け入れ、設備の設営、先導、警護などのためにカフトを「神封戸」として指定する必要(必然)があったという、この推論の帰結としての試案である。

神封戸は、現代の歴史学事典では、「ジンフコ(ゴ)」という訓である。律令の条文は漢文であるので、当然、音読みをするからだ。しかし、上古に、市井や里俗ではそういう訓を口にしたとは思えない。

「神」の部分は和語の音でいえばkam(カム)である。「神戸」がそのよい例である。律令制度のもとでの官僚用語としては「ジンコ」であったかもしれないこの「神戸」は、実際には、ジンコ音で残っている地名がきわめて稀なのである⁴⁵⁾。圧倒的に、kam(カム)の系統で残っているのだ。「カンベ」や「コウベ」などである。

「戸」は to(ト)または he(be)(へ、べ)であった⁴⁶⁾。「コ」や「ゴ」と読むケースは残存地名からみると、皆無といえそうである。すなわち、圧倒的に多いのは、「コウベ、カンベ」という場合の“ベ”の系列と、「かうと(ど)、かと(ど)、かのと、かみど、かんど、こうと(ど)」などの“ト”(“ド”)の系列の二つである。

そこで、後回しにした「封」という文字についてだが、この文字はそもそも古事記や万葉集では使用例がないのである。つまり、和語の音に用いたケースがないということだ。日本書紀で、漢語(の意味)として用いているだけである。「封」の文字は、律令制において、輸入語としての制度名として初めて登場したものである⁴⁷⁾。高官や社寺に、土地を定めて収税権などを与えるという、税制にかかわる官庁用語である。当時、この意味を表す和語がないため、そのまま使用され、官民間わず、「ホウ」(漢音)か「フ(フウ)」(呉音)の音で発音されていたと思われる。漢字は、仏典(お経)とともに日本に入り、それは呉音で読まれていたので、「封」は、フ音が知識層では一般的だった。

そこで、結論を言えば、「神封戸」はカム・フ・トと、一般(と言っても識字率は僅少だったが)に訓まれたという推測が成り立つ。カム・フ・ベとならなかった理由は三つ考えられる。第一に、カム・フ・ベにおける「フ」と「へ」という「f」音の繰り返しが忌避されたこと、二番目には、戸を「ト」と発音する古代語類例が多いこと。古事記やこれを素材とする祝詞などに残る「祓戸」、「磐戸(岩戸)」、「気吹戸」、「科戸」、また一般語の「瀬戸」や「鳴戸」などである。最後に、「戸(ト)」の古義は「両側から迫っている狭い通路」(「岩波古語辞典」)であり、カフトの地形感覚にもふさわしく、そのようなイメージも多少加担していたかもしれない。

このようにして、長い時間の中で、カフトの谷で、自らの地域をカムフトと呼ぶことが定着していったという推測が成り立つ可能性を提唱しておきたい。

カムフトからカフトへ 川俣氏の差配下にあるころ、神封戸に指定され、はじめての公的な名らしいものとして溪谷の民に時間をかけてゆっくり認知されてきた。しかし口伝であるため、その原義もあいまいなまま時間が過ぎ「カムフト」という

45) 管見にして、私は岡山県津山市神戸(ジンゴ)一例しか知らない。

46) 実際、「ト」(甲類)は、古語では「扉」の意味で、これにあたる漢字として「戸」が選ばれていたし、「へ」は、乙類の fe と発音し、それは竈(かまど)の意味を持ち、その提喻(synecdoche)として、漢語の「戸」と重なるから、「戸」は「へ」(濁音も)と読まれた。一方、漢語の「戸」(コ)は「外来語」として「家」をあらわし、これは官庁用語である(戸主、戸籍、戸別など)。また、音だけでみると、万葉仮名においては、和語のト音に充てられる漢字は「戸」(そのほか刀など)であり、和語のコ音に「戸」の漢字が充てられるケースはない。

47) 「封」の用例「山田寺に封三百戸を施す」(続日本紀、文武天皇)など。『岩波古語辞典』。

音だけが伝承され、「ム」は自然に「ン」へ、そして脱落し、カフトと変化した。すなわち、カムフト＞カンフト＞カフトである。さらに、その由来も忘却された中世に、この谷を支配した武士集団によって鹿伏兎という鄙字が充てられ、のち好字の「賀太」や「加太」に変化していったというのが筋道ではないだろうか。もちろん、この推測を傍証する史料があるわけではない。

付け加えるなら、小さな痕跡ではあるが、カフト川は、板屋の南、すなわち川俣神社がかつてあった場所では、「富人(トント)川」ともいわれたそうだが⁴⁸⁾、富人は「フト川」とも読め、封戸の名残の音転訛かもしれない。

5 字名とカフト

字名(その2)「神武」

「神武」ここで検討したいのは加太神武^{じんむ}である。神封戸説の補強として論じたいのである。カフトの集落にある字名^{あざ}の一つ「神武」は、天皇名との所縁などありえない。『三國地志』などでは、「神部」という表記もしている。そのことからみても、元の音はジンプであったろう。但し、これでは音読みであり、さらに遡って音を復元する必要があるようだ。この「神」の部分はカミあるいはカムであったろう。すなわち、カムフという音をもつ地名であったことが想定されるのである。

もしかすると、「神武」こそカムフトと結びついた最古のカフト(プロトタイプ)の名残かもしれない。地理的に見ても、この集落はカフトのほぼ真ん中に位置する。また、こういう事実も指摘しておきたい。それは、加太神武字深切を源流とし、加太神武を流れる川が「神武谷川」であるのは当然として、加太神武とは山を隔てて柚木を源流とし加太梶ヶ坂のさらに東の加太向井で加太川に注ぐ川の名が、なぜか「小神武谷川」であることである。山を隔て、一見無関係に見える二つの川が、類似の名前を持っているのである。これは、カムフトが今のように「加太神武」集落に限る狭い地区名ではなく、往古この谷の中心部全体を覆う古形の呼び名であったことの痕跡かもしれないのだ。

さらに、加太神武に現在もある福蔵寺は、山号を神峰山という。この山号も、「神封」の音を想起させる。時代的には福蔵寺開創は17世紀中葉だといわれ、当然、字名^{あざ}に則った、江戸時代にはいつてからの山号なのだが、神封戸をどこかで想起させる音を内包する小さなカケラでもある。

さらに屋上屋を重ねる蛇足が許されるなら、「加太市場」の神福寺(シンブクジ)は、もとの「薬王山新福寺」(応永元年・1394年の棟札)から、後世に、村の伝承を知っていたかもしれない僧侶の思いつきによって、神福(カムフ)という寺名に変更されたのかという妄想もふと頭をよぎる。

カフト以前 この山峡全体は、「神封戸」とは別に、伊賀側から(つまり外界からは)単に「大山」と呼ばれていたらしい記述を私たちは知っている。「積殖(現在の柘植)の山口に到りて、(中略)大山を越えて、伊勢の鈴鹿に至る」という大海人皇子の壬申の乱の行路の記述である⁴⁹⁾。そのコンテキストから、「山口」は加太一ツ家の麓(「岡鼻」)を指し、「大山」はカフト溪谷ぞいの山峡全体を指すと推定され、またこのルートは現在にその名が残る「大岡寺川」に沿う⁵⁰⁾。カフトへ入る場所は伊賀側から「口」や「端」という呼称が示し、その先は「山」であり「岡」である。大和朝廷からみた東国の始まりの象徴として見られていただろう。東国という異郷への障壁意識である。

一方、鈴鹿側からは、カフトは、権力の中核へ向かうために潜り抜ける隘路で、カフトは「谷」(後世、「谷中」と俗称されていた)でいどであっただろう。

カフトから鹿伏兎へ 地名は他との弁別の必要性から初めて生まれるものだから、カフト谷の住人は、どのように他者が呼ぶかは、どうでもよかった。だからこそ、この谷筋で初めて「神封戸」というアイデンティティを与えられたのは強い刻印となったともいえる。しかしこの呼称はのちに突如凍結し、そのまま、谷は10世紀以降、長いまどろみに入る。

⁴⁸⁾『関町町史』

⁴⁹⁾「到積殖(つむゑ)山口」、「越大山(おほやま)至伊勢鈴鹿」『日本書紀』卷第二十八

⁵⁰⁾この山越えルート上には「大岡寺川」(たいこうじがわ)が流れているが、河川名に先行して字名「加太北在家字大岡寺」があったと思われる。この「大岡」というのは「おおおか」と読むと、「大山」や「岡鼻」につながる。「寺」(じ)は「路」(じ)の表記替えであろう。すなわち、「おおおかみち」である。ちなみに、大岡寺と書くのは、おそらく加太谷の外(旧神戸村、現・亀山市)の太岡寺というかつてあったと伝えられる著名な地名の、後世における影響かもしれない(ただし大でなく太であった)。

まどろみには深い浅いはあっただろう。正平年間(1360 年ごろ)にカフト谷の外(今の亀山市中心部)を支配していた豪族・関盛政の四男・関盛宗(實親^{さねちか})がカフトに入り込んで、自らの領地としたという出来事はカフトの人々に多少の変化だっただろう。多少の、というは、関盛宗が入ってこようと来なかろうと、この頃までにすでに関氏の事実上の支配地に組み込まれていたはずだからである。“担当者”が関盛宗ということが明らかになっただけである。

これは想像だが、カフトを含めてこの周辺を長らく差配していた川俣氏族は、古代が終わるころ(13 世紀初頭)には、武士の勃興と入れ違いに、その役割を終えて、古代の霧のなかに消えていったのだろう。

関氏は、今の加太市場の裏山に城(砦⁵¹)を築いた時には、すでにカフトという伝来の地名を村民は暗々裏に認知していたはずだ。盛宗は、さっそく、このカフトに鹿伏兔という漢字を充て、また自らも鹿伏兔と名乗った。いかにも野趣丸出しの鄙字である。ともあれ村人にとって自称であった村名カフトが、初めて文字化され公称されたのはちょとした出来事であったかもしれない。自分たちの生活圏は、「鹿伏兔」であるという自覚の誕生だ。もっとも、カフトの民にとっては、こういう出来事は大変事とまではいかない。それ以前からカフトであったからだ。

字名(その3)「中在家」、「北在家」、「向井」、「金場」、「梶ヶ坂」

カフトにおいて生活が営まれている地区の字名^{あざ}を西からあげると、「一ツ家」、「中在家」、「北在家」、「板屋」、「神武」、「梶ヶ坂」、「市場」、「向井」、「金場」、「越川」である。先に述べたようにこれに加えて「平地」、「牛谷」、「大谷」、「大杉」をあげる古書もあるが、「平地」をのぞいて、集落の痕跡(または記録)が明確でない。

さて、この中で、「一ツ家」、「板屋」、「市場」、「越川」については、すでに斎王関係地名として、また「神武」はカフト語源の項目で述べた。以下、残る次の「中在家」、「北在家」、「梶ヶ坂」、「向井」、「金場」について検討してみよう。

「中在家」、「北在家」 カフト谷に、「中在家」、「北在家」という比較的大きな字が出現したのは、いつのことだろう。すでに考察した「市場」や「板屋」などと異なり、「在家」は、音読み地名で、中世以降の命名の可能性が高い。おそらく鎌倉時代の始まりとともに行われた荘園制度での「在家」と関係があるのだろう。この古い谷間から、古代祭祀の伝承の記憶がちよと薄れはじめた時代に谷へ入りこんだ関一族が、カフト谷の一部を拓き、猫の額ほどの新たな田畑を「在家」と指定し、これに労役の提供を課し収穫に課税をした。「神封戸」時代とは別の、新しい支配形態が始まり、それとともにその新開地に「在家」の呼び名が定着していったと考えられる。

カフトの谷には、「イツキ」や「カムフト」由来の土地名称とは別系統の新しい名称が混在するようになったのだ。「在家」はやがて広がるにつれて、「中在家」、「北在家」に別れた。おそらく中在家が先に開墾された場所だろう。そこには、より古い名があり、そこに上書きされた可能性もある。そして、その古形は^{あがた}県から転訛した“アマタ”だった可能性がある。理由は、川俣神社の本来あった場所が、中在家の「嶋ノ川原」だといわれているからだ。そして、そこを廻るように流れているのが現・アマタノ川だからだ。この川原一帯の荒蕪地を、開拓以前の人々はアマタと読んでいたかもしれない。川俣県(造)*kahamata-agata*、は【a】段音の連続で、しかも両音節とも類似した音価を持つため、おそらく“アマタ”に縮約したと思われる。

この周辺には、耕作に不向きな「嶋ノ川原」、「北川原」、「縄手川原」があり、また新田開墾(予定)地を示すと思われる「片芝垣内」^{かいと}、「谷ノ垣内」、「上ノ垣内」、「板屋」の南には「裏ノ垣内」^{あざ}などの字名が多い。いずれも鈴鹿山系より傾斜の緩い布引山地にあり、カフトでは、南方向へ新田開発が進んでいたことを示している。南端の「南在家」が正式なカフト地区名として認知されていないのも、そこがいちばん後世の新開地だったからだろうと考えられる。

「在家」や「垣内」は「神封戸」との対比で生まれた“比較地名”ともいえる。実際、埼玉県川口市にも、「在家町」という町名があるが、そこに接して(東側に)「神戸」という古い^{あざ}字名がある(神戸は明治 22 年まで神戸村だった)。つまり、同じ地域に、「神戸」と「在家」とが古代と中世の時代差的なモザイク模様を描くというのは、村の開発史ではありそうな

⁵¹) 城の虎口(門)には高さ 2.7m、長さ最長部分 17mの野面積(のづらづみ)石垣が残っているが、これは傾斜地を支える土塁である。城壁ではない。中世に地侍たちが割拠したこういう山城は天嶮に立地し、全国に 10 万以上はあり、安土城などから想像する「城」などとは全く別物。

気がする。なお、加太中在家では複数個所で縄文土器が見つかったという。これは何を意味するかというと、当時は荒蕪地で、稲作が行われていなかった可能性が高いということで、そのことは言い換えれば、ここに、今、耕地があるのは、後世の新田開発によるものだということである⁵²⁾。

「向井」 この地区は加太川を挟んで、「市場」の南に位置している。

「向井」には平子川と小神武谷川が流れ、いずれも加太川に注いでいる。「市場」の“向かい”にあるという意味の単純な命名だと思われる。このことは、「向井」が「市場」に比べて、新しい(あるいは補完的・相対的關係)ということの意味する。おそらく本来は「市場」の一部であったかもしれないという想像もはたらく。「向井」の東側に「大垣内」と「東垣内」という小字がある。「市場」は北側に鈴鹿山脈が迫っていて、新田拡張はもっぱら向井の布引山地方面へ延びたということをよく示している。

それが中世以降、市場と切り離された字名として独立した、と考えられる。両地区を区切るように加太川が流れているので、生活上の区別から、左岸(山手側)を「市場牛谷」つまり牛谷溪谷側の市場と呼び、右岸(低地側)を「市場向井」と呼び分け、いつの時代からか、前者は単に「市場」となり、後者は、「向井」になったのではないだろうか⁵³⁾。

江戸時代の一部の地図では、「市場」という記述がなく、代わりに「下加太」と大きく記され、加太川の北が「牛谷」、南が「向井」となっているものがある。もっともこの地図では「板屋」の記載もなく、上加太という大きな地区に「中在家」と「神武」が枝分かれするように記載されている(『伊勢國大繪圖』)。この時代の地図の多くは、実見実測を欠く杜撰なものも多く、必ずしもあてにはならないことがある。少なくとも、「板屋」や「市場」が存在しなかったという証しには到底ならない。明確に記載している同時代の地図のほうがむしろ多いからである。

「金場」^{かおげ}、「梶ヶ坂」^{かじかさか} この二つの字名は、ともに鉄に関係すると思われるので、まとめて、考えてみたい。

「金場」は古い文献では、金鑄場(かないば)とか鐘鑄場(かねば)、カナイバと書かれたものがあるが、いずれもあきらかに鉄の加工と関係する地名である。

「梶ヶ坂」も、かつては鍛冶ヶ坂と書く記録もあることで分かるように鍛冶と関係する地名である。鍛冶は、大化の改新時代(7世紀中葉)にすでに鍛冶部(かぬちべ)という部民が存在しているという記録があるので、発祥は古いといえるが、やっかいなことに「鍛冶」は現代にも通用している語である。つまり、地名としての「梶ヶ坂」を考えると、その地名発祥の年代はその名称だけからは定め難いことになる。

まず、「金場」(金鑄場)という地名であるが、あきらかに、鉄を鑄出したり加工したりする仕事場、集落であった。金場集落から直線距離で 400 メートルほどの「山塊頂部一帯から金属生産を実施していたことを示す大量の鉄滓や炉壁が採集されており、付近に関連工房が所在したことは事実であろう⁵⁴⁾と「亀山歴博」は述べている。そして、ここは近世以降のものではないかという指摘は、その通りとして、一方で、古代から存在(断続的であれ)していたということも否定するものではないだろう。なぜなら、技術遺跡はイノベーションにより簡単に上書きされてしまうものであり(地名も同じ)、古代は隠蔽され、そのまま残るといふことのほうが稀だからだ。

製鉄作業には「燃料、流水、金属原料」の三つが必須だと言われる。木材と溪流と砂鉄である。普通の農民より“優秀”な異邦人とみなされるタタラ(製鉄)技術者が、場所の清浄を求め谷奥へ入り込んで定住し、しばらくすると再びどこかへ去っていった。カフトはおそらくそういう地理的条件をいくらかは備えていた場所だったことは確かである。

そして、この場所は、さらに「梶ヶ坂」という地名との関係を連想させる。

52) 加太中在家の大平、加太北在家の口林では縄文土器が見つかった。弥生の痕跡は見つかっていない。一方、弥生遺跡があるのは向井、市場と梶ヶ坂にまたがるあたりである。(「亀山歴博」)。このことは、カフトにおける古代地名と中世の地名のモザイクパターンの説明根拠ともなる。カフトのような古代が停止した閉域での地名は年輪のような模様がみえるのである。

53) 『三國地志』では、「本郷市場」は「牛谷」とは別の字(あざ)のように扱われている。なお「本郷」というのはカフトの中心という意味でそうとう後世の命名である。

54) 「発掘調査など正式な調査は一度も実施されておらず、正確な年代は不明であるが、地名表記のあり方などから近世以降の資料と考えられている」。(「亀山歴博」)

次に、梶ヶ坂という字名^{あざ}は、近世発祥であるとしても、前段での推測と同様、古代になんらかの鉄製品、とりわけ祭祀用具の部品か原材料を鋳出していた場所、あるいはその名残を継承したことを否定するものではないだろう。「鍛冶」は、古代には、異能の人としてみられていたという。すなわち、一般の人から、かなり神秘的で印象深く受け取られただろう。周辺でこれを見守る人々は、この異邦人の作業する土地の名を、自分たち常住の地域と区別して名付ける動機がはたらいたことは想像に難くない。

カフトが、神封戸となったのは、繰り返すが、コメからの収税目的というより、奉斎にかかわる使役提供であったとするなら、この目的と関係づけた祭祀用途に使われる鉄細工、あるいは、木工細工用の工具製作とつなげることが可能なかどうかを考察してみることは許される。「市場」を挟んで西に「梶ヶ坂」、東に「金場」があることは、なんらかの意味があるかもしれない。また、市場、金場は「場」という共通音をもつことも気になる。祭祀と祭具というセットである。

古代的な祭祀の呪具などは、斎王とは関係なく、ローカルにも個別に存在していたはずだ。ところが、一般の遺跡発掘で、いわゆる祭祀用具と特定できるものが出てくるのは稀だという。これは、祭祀が、古来、一定不変の場所では行われない習俗とも関係があるようだ。つまり、大規模で恒久的な施設としての祭祀場が存在しにくかったゆえ、当然遺跡が発掘されにくいのだ。斎王群行の道程から遺跡・遺物が見つからない理由でもある。まして、カフトのような、山間のきわめてローカルな場では、目を奪うような鉄製品や木工品の形で儀器が出土する事は、まず期待できないような気がする。カフトでは、溪流の氾濫なども頻繁だったし、何より、祭祀の時代は太古に終焉をむかえていた。ただ、伊勢と金属祭祀の関係でいえば、カフトでも忌部^{いんべ}・齋部^{いんべ}氏の関与は問題になるはずだが、ここでは以下の推論を述べるにとどめ、これ以上立ち入らない。

忌部^{ひろなり}（齋部）廣成が、大同 2(807)年に著した書が示しているように⁵⁵⁾、伊勢にいた忌部支族は、祭祀用の金細工を製作奉納していた可能性があり、この一族が川俣氏族と関係があるか、川俣支配が及ぶ地域に住んでいたかの可能性を考えてもよい(前出の「ミカドホカイ」との関係)。当初は、それにかかわってカフト谷の金場にも細々とした作業をする場があったという想像も許される気がする。「金場」至近に古墳(笹ヶ平)があることも注目に値する。このことはあとも少し触れる。ただし、カフトにおける製鉄や製品製造はじつに微々たるものであったことにもたしかだろう。

字名（その4）鉄地名

金属名の小枝 「金場」と「梶ヶ坂」の二つの集落(地区)を鉄地名として考察してみたが、ここでは「鉄」地名とカフトの関係について少し小道に分け入り字名、小字名^{あざ}の中にも「鉄」にかかわりそうなものをさらに探してみたい。

「出雲谷^{かんがたん}」、「菅ヶ谷^{かんがたん}」カフトには、「出雲谷」という名が見出される。「出雲谷」は、カフトの北側の山麓から「板屋」あたりで加太川へ注ぐ溪流の名前でもある。出雲族の小さな集団移住の残像というより、その技能(金属加工いわゆる“タタラ”)の換喩地名であると思われる。いずれにしても「タタラ」に関する地名の多くが、出雲発祥、出雲伝来、出雲からの移住と関連付けられることは今では定説である。出雲が、カフトでは地名とならず谷の名前になったのは、おそらく、砂鉄採取の場と関係があるのかもしれない。磁鉄鉱の細粒である砂鉄や漂砂鉱床が、かつては、川岸などに堆積していたのではないだろうか。この谷には、その上流で枝になった「勘ヶ谷^{かんがたん}」という小さな谷があるが、これは、「金ヶ谷」(かんがたん)の文字変化かもしれない。さらに、「向井」のほぼ南に位置し、布引山地の錫杖ヶ岳から落ちる越川の谷筋には、「菅ヶ谷^よ」という小字がある。「すがんたん」と訓むらしいが、これも、「かんがたん」と読めなくはない。ただし、いずれの場所にも集落や人家があったという記録も痕跡もないので、もし製鉄に関係しているなら、砂鉄を求めての小さな作業場程度であったかも知れないが、何ともいえない。

「黒」 出雲谷川が加太川に注ぐ地点に「小黑見」(古くは古久呂目)という小字名がある。周知のように、カネ、カヂ、クロという音をもつ地名の多くが、製鉄の古い技能と関係がある可能性がある(柳田國男『地名の研究』)。とくに、「黒」のつく地名の多くは、製鉄(タタラ)と類縁がある地名だといわれる。真砂砂鉄は光沢のある漆黒色であるため、それ

⁵⁵⁾ 齋部廣成撰『古語拾遺』西宮一民校注(岩波文庫)

が「黒」という地名になることが多い(それにたいして、赤味がかった砂鉄は、赤目(あこめ)砂鉄という)からである。カフトの「小黑見」も、この真砂砂鉄の採取地であった可能性がある。「見」は「目」とも通じ、色の形容接尾詞である。「その色を帯びた場所」と『岩波古語辞典』では定義している。カフトには、さらに「黒ヶ谷」、「黒岩谷」、「平倉」(倉は黒に通じる)という字名も存在する。ただし、加太谷の北側一帯に存在する石炭の「黒」を示す可能性もややある。鈴鹿層群と東海層群からは亜炭(褐炭)が採掘されるからである。明治時代の地図や商工省鉱山局報告(1932年)には加太の炭坑の採掘箇所地点が記されている。山地には大昔から、黒っぽい岩石が露出していたのかもしれない。

「笹」 「笹」がつく地名は、砂々、小々鉄、砂鉄などから由来することが多いが、カフトを調べると、さきほど挙げた「笹ヶ平」をはじめとして、「笹見谷」、「笹原」、「イササヶ谷」などの小字名が散見される。もちろん、この中には、実際の植物の笹と関連した地名もあるだろうが、山には植生として笹が多いため、語源が忘れられて、発音や文字化の表面に欺かれることはよくある現象である(鶴のつく地名がツルの飛来地語源に誤って結びつくのがその例である、本来は水流＝湿地であるのに)。

「灰」、「火」、「焼」 タタラの燃焼に関するものとして「灰ヶ谷」、「灰山ヶ谷」、「火ノ谷」、「焼(?)」が梶ヶ坂などの北側斜面に見られる。

「吹」 タタラ吹き^{ふいご}の轆^{ふいご}に関係するものとして「吹込谷」、「福ヶ谷」(福＝吹)なども「北在家」の西北に散見される。

「ハゲ」 金属抽出作業には大量の樹木が必要で、ある研究によると、「たたら製鉄では(略)木炭を大量に使った。(略)1箇所の鉦で使う炭は810tであり、それは山林60ha分(甲子園16個分)であった」⁵⁶⁾という。この材木伐採の結果を示す「^{はげ}ハゲノ谷」や「^{はげ}ハゲの谷」はいずれも北側斜面にあり、たたら跡を示唆する字名であるかもしれない。

「銭磨」 この字名の訓や意味は不明だが、金属と関連付けてあげておく。

「山神」 気になるのが、鉱山の神として知られる「山神」祠がカフトには25か所もある(あった)ことである。そのほとんどは、山中の祠や石碑である。もちろんこれらも、祖霊神であったり、木樵や炭焼きや猟師などの山林生活者の守り神でもあったりするから、すべてをそう決めつけるわけにはいかない。ただし、北在家の北側にある谷の名前が「山ノ神谷」であり、先にあげた出雲谷と同じ山塊にあることは注目してよいだろう。

ここで挙げた小字名は前出の昭和52年出版の『関町町史』から抽出したもので、この時点で、すでに忘却されたものの、消え去ったもののほうがはるかに多いとしなければならない。それにも拘わらず、一つの村だけで、これだけタタラを想起させる地名が残存するのは、何らかの説明が必要とされるだろう。

鉄の存在 さて、この鉄素材は実際にこのカフトにあったのか。この問題については、いっそう門外漢であるので、二次史料からの議論しかできない。もっぱら、『亀山市史、自然編』を参考に、いくつかの既知の知見を加味して簡単に述べておきたい。市史によると「加太盆地は鈴鹿山脈中に形成された東西方向に狭長な堆積盆であり、狭い堆積盆中に層厚1500m近い鈴鹿層群が堆積している。(中略)。盆地内の鈴鹿層群の一般走向がほぼ盆地の長軸に一致し、(中略)このような事実から鈴鹿層群は加太傾動盆地の埋積堆積物と考えられる」という。すなわち、カフトの北側山塊はいうまでもなく、カフトの谷筋一帯が、鈴鹿層群の一部であるということである。このことを前提にして、市史では、鈴鹿郡教育会編『鈴鹿郡郷土誌』(復刻版)を引用して、「亀山市には石英、長石、黒雲母、黄鉄鉱、方解石、褐鉄鉱」が存在すると記載されているとしている。

以上から推測すれば、カフトでは、鉄素材が何らかの形で得られたということはまちがいないだろう。

また、より重要な情報として、やはり市史の自然編で、(旧加太)金場からは、磁鉄鉱が、加太市場付近には加太花崗閃緑岩が広く分布し、さらにカリ第一鉄パーガス閃石が発見されている、と述べている。ついでにいうなら、北在家にあるイシバン工業加太砕石工場で鈴鹿層群から採取している石は花崗岩を含み、この副成分鉱物に磁鉄鉱がある。またバラスト用に、粘板岩も採石しているが、粘板岩には酸化鉄が含まれている。

⁵⁶⁾ 東京大学大学院農学生命科学研究科(森林科学専攻 森林風致計画学研究室)

さらに付け加えるなら、伊賀町歴史資料館の出版物「伊賀は古代の鉄の宝庫考」という小文は、伊賀が古代における産鉄地であったことを詳述している。とくに、柘植の穴師谷^{つげ あしだん ゆやたん}や湯屋谷などの地名は、採鉱が行われた痕跡であると論じている。柘植は、幾度もふれたように、カフト「一ツ家」で境をなしている地域である。この鉄文化の影響をカフトが受けていなかったとは考えにくい。笹ヶ平古墳の石室構造は、先に述べたように伊賀のそれと類縁性があるという⁵⁷⁾。また、繰り返すようだが、笹ヶ平の山塊頂部一帯から金属生産を実施していた痕跡が見つかっている。この古墳の被葬者が伊賀地方(それも柘植)に関係し、それはさらに鉄にも関与する小豪族であった可能性は捨てきれない。さらにもう一段大胆な推測を進めると、この小豪族とは、川俣氏族の一つではなかったか。とすれば、「亀山歴博」の述べる「(被葬者と)古代王権との深い繋がり」や「原・東海道」の管理者⁵⁸⁾という推測にも整合性をもつのではないか、ということまで想像は広がる。先の注釈でもふれたが、伊賀には大毘古命を主神とする敢國神社^{あへくに}が現存し、大毘古命はいまでもなく川俣氏の始祖である。ちなみに柘植一帯は、古代から阿拝^{あへ}と呼ばれた「くに」(地域)であった。

ささやかな鉄製品 いずれにしても、上で見たように、カフトには鉄にちなんだと思える地名が多い。しかし、この製鉄あるいは鉄器製作は、カフトにおける産業というようなものではなかったであろう。人々の日常は、むしろ、農耕や山林作業であり、薪や炭などを産していた。鉄は、斎王通過に関して補助的な祭具製作から始まったと思われるが、この技術のささやかな継承は、中世以降にも形を変えて行われていたと考えたい。

カフトの鉄生産は、周辺部(伊賀や鈴鹿や近江)のそれと比べて、規模も小さく、鉄の質もよくなく、産業としての競争力はなかっただろう。いわゆる野鍛冶程度である。その上、斎宮(現・明和町)にも本格的な工房ができて、やがて、カフトの祭具など何ほどのものでもなくなり、製鉄も衰微しただろう。ところが、時代が下り中世となると、農具と、多少の武具、武器などの需要が高まり、これらを自給的に加工することは、必須となる。幸いに、カフトは、鉄器生産に必要な鉄(品質と量は劣っていただろうが)と豊かな水と、燃料になる木材が手近にあった。さらに古代から祭具製造の経験が底流に微かに流れていた。ちょうど、この時代に土豪(関一族)の支配が谷に及び、とくに14世紀の半ばからは、鉄の農具によって新田開発も督励され、「在家」が開拓されたり、武具や武器の需要も増えた、という筋道は十分に成り立つ。

このような鉄名称の小学^{こあざ}が古代層から浮かび上がったり、新規に創設されたりしたのは、ちょうどこのころだったのではないだろうか。当然、こういうことを支えたのは、上古からのカフトの谷に伝わる祭礼伝統が担った目に見えぬ総合的な文化力かもしれない。

むすびにかえて

カフトの諸層 カフトの基底部に立ち返るアルケオロジイから見てきたこと、それは、地名起源のマッピングが見せてくれたカフトの年輪と空間のパッチワーク模様である。古代祭祀層、中世的土豪支配層、新田開拓層、金属加工層が、時間ごと、地勢ごとの色分けを描き出していることである。また、もうひとつは、地政学的にさまざまな点で特殊な条件を帯びていたカフトは、実は、古代には活き活きしていただろうということ、そして、その姿が今推定できるのは、その後のガラパゴス的閉塞のおかげだということである。もちろん、このことはカフトを貶める意味でそういうのではない。

縄文、弥生時代はさておき、4世紀ごろから、斎王群行という習俗は、谷の人々にさまざまな刺激を与え、また文化をはぐくんだ。その通過を素朴に誠実に受け入れ、力を尽くし、またそこから付随的に発生したであろう祭具製造などにも、利害を超えて日常的に向き合ったと思う。しかし、この谷からは、覇権意識は生れなかった。歴史上目立つような事変に関与する事もなかった。史料にカフトが登場しない、という逆照射がそれを証明している。

時には、外界の政変に巻き込まれることはあったが、自らが発信することはなかった。古代からほとんど変わらぬ平穏な姿を保つことを選んだこと、これは人々の気質にも反映しているといえるのではないか。稲作が主体の農村である

57) 「亀山歴博」「亀山市史」考古編・第6章「笹ヶ平古墳」

58) 「亀山歴博」は、「被葬者が6世紀後半の古代王権と深い繋がりを持ち“原東海道”の管理に携わっていた」のではないかと推測している。

場合、凶作、豊作などの極端な変化に加えて、支配、被支配、貧富の差など経済活動から生じる浮き沈みに翻弄されることが多いだろう。人々の心にも波風が立つ。しかし、主たる生業を山に求めるカフトの人々は、大きな変動にさらされることなく(たとえ低い水準であろうとも)穏やかさを維持し、安定を慣習として身につけてきたといえよう。斎王の通過に奉仕し見守り、数百年を過ごす人々の住む谷に、やがて律令制度下で「神封戸(カフト)」の名前が仮称されていく。人々の地名への意識は、おそらく9世紀末ごろ、すなわち谷の「意味凍結」の始まりと軌を一にしているであろう。

古代から中世へ やがて、律令制の世界も緩み、地方で土豪が勃興してくるころ、亀山方面から谷に手を伸ばしてきたのが関一族である。目的も明確でない形で160年間ほど、このあまり用もない谷を領有していたと思われる⁵⁹⁾。1360年あたりになるとカフト谷を統治すると称して、関一族の四男・盛宗(實親)が送り込まれ、関氏の分割統治の対象の一つとなったのだ。この時からカフトの谷には「鹿伏兎」という文字が貼りつけられた。山野が拓かれ、その時代の機運に沿うように、カフトにも新興の「在家」や「垣内」^{かいと}が開発された。開拓には大いに野鍛冶の技が活躍した。鉄農具による効率化である。谷の各地区に、武家社会との係わりがもたらした寺が建立されはじめたのもこの頃からであろう(カフトには8ヶ寺が現存⁶⁰⁾)。それは、律令世界以前からの遠い記憶と重なる川俣神社が人々の精神構造の深いところに潜在する一方で、外の世界に消極的ながらも目を向けるようになることを意味する。

南北朝、応仁の乱などが、谷の一部の人々の生き方をキナ臭くしていく。農民はたちまち地侍に変身し、当時、全国に十万程度あったといわれる土豪の集団と同じように、一応、参戦してみるが、さして活躍することなく、戦いが終結すれば、カフト谷に舞い戻ってきた。つまり鹿伏兎氏は領地においても権力でもさほどの拡大をみなかった。

こうして、鹿伏兎氏は鳴かず飛ばずで、200年ほど続いた。関の本家と支族(鹿伏兎、神戸、峯、国府)とのつながりも混乱の世で、だんだん薄くなり、鹿伏兎は山間の郷土地主^{こうしじぬし}という存在になっていく。

戦国時代も後半に至ると、大集団で火器を使用して敵を押しつぶす織田や豊臣が登場してくる。そこでは鹿伏兎の百姓侍に活躍の場があったとは思えない。文禄(太閤)検地では、カフトは1700石程度⁶¹⁾だったが、この石高は、のちの検地なども考慮してみると、実際の収穫高にほど遠く、単に村域の広さからの計算上のもと思われる⁶²⁾。また、この程度の石高(経済力)では、リクルートできる兵員は、多く見積もっても20人だっただろう⁶³⁾。しかも、そのほとんどは農家の次男以下で、徒士や足軽のような、道具持ち、軍馬の世話、人足などの後方支援の一時雇いでいどだ。大名などに召し抱えられたわけではない。世はすでに、兵農分離が進み、兵の規模も千、万単位の集団戦となっていたのだ。谷奥に割拠する地侍が、個別に刀や槍をもって、参戦し手柄を立てるというような時代ではなくなっていた。

初代・鹿伏兎盛宗(實親)から数えて9代目の鹿伏兎定義⁶⁴⁾は、晩年は戦意も喪失したらしく、京都へ逃亡、余生を街の片隅に潜んで過ごし、そのまま消息知れずになる。鹿伏兎氏によるカフトの支配は自然消滅するのである。

近世 鹿伏兎氏は、戦国時代にも歴史を画するような事跡にかかわることもなく、その末裔も関ヶ原の戦いで、幸か不幸か寝返り大名小早川秀秋についたため、徳川幕府下で、岡山藩士としてひと時よい目をみたのも束の間、2年後には秀秋の急死、改易のため、失職し、西日本をさまよい行方知れずになった。

カフトに残った鹿伏兎の係累は、その後、村の郷土や地頭のようなものであったり、時に僧侶であったり、江戸へ出て商人となり「伊勢屋」を営んだりした。幕藩体制下で、鹿伏兎の集落は久我村、古厩村とともに、津藩の領地に組み入れられそれは明治維新に至るまで250年間ほど続いた。鈴鹿郡を領した亀山藩でなかったことには意味がありそう

59) 「山間のへき地であるがゆえに集落らしいものも存在せず、和名抄にも入れられなかった土地」(『関町町史』)

60) このころから江戸期にかけて、龍淵寺(中在家)、天祥寺(北在家)、浄専寺(板屋)、神福寺(市場)、常光寺(梶ヶ坂)、聴川寺(向井)、西円寺(越川)、福蔵寺(神武)が建立されていった。

61) 1713石2斗5升。「文禄三年十月伊勢国中御検地高帳写し」『三重県史』資料編 近世1より。

62) カフトは、別のところで述べたように、現在でも、山地が92%、田6%、畑地2%である。

63) 陸軍参謀本部編『日本戦史』(1901年)などによれば、戦国時代の兵員動員力は1万石につき250人ぐらい(姉川の役を基準例として)。鹿伏兎の実質の石高はせいぜい700石程度(1700石の40%とした)での試算。

だ。津藩に伊賀国が含まれ、その出入り口(というより塞ぎ)としてカフトを領したといわれるが、これもカフトと伊賀とのつながりという古層範疇がかすかに作動した結果かもしれない。カフトの表記は鹿伏兎や家富唐、賀太、加太などゆれていたが、これが加太に定まるのは、江戸時代中期以降ではないかと思われる。

村に残った鹿伏兎の末裔に繋がる鹿伏兎重宣が伏見の城代・松平定勝の家来になり、のち、村に戻り隠居した。あとを孫の重孝が継いだ。その後の紆余曲折の軌跡は、江戸開府以降、知られる限りでも、岡山、京都、伊予(愛媛)、江戸、高田(新潟)、白河(福島)、そして桑名となかなか定まらなかった。

近代 江戸時代は終末を迎えた。時代が明治に変わる瞬間の加太氏の末裔の加太縫殿介^{ぬいのすけ}は 19 歳で、桑名藩士だった。藩は賊藩とされ、藩士一同謹慎の身であった。ようやく自由の身となった明治 3 年、21 歳の縫殿介は勉学のため江戸へ向かうが、その途中、池鯉鮒宿^{ちりゆう}(現・愛知県知立市)でチョンマゲを切ってザンギリ頭になり、東京で名前^{くのにり}を邦憲と改めた。藩から貢進生に選ばれ、司法省法学校に学び、ドイツ、フランスへの留学もはたし、司法判事として、大阪控訴院長、関西大学初代学長、貴族院議員となった。彼は、鹿伏兎盛宗(實親)から数えて 19 代目だった⁶⁵⁾。

一方、谷あいの共同体加太村は、鹿伏兎氏から出た坂一族の人々やこの谷に定住した篤実な人々によって治められていた。洪水や山崩れ、火災とさまざまな試練を経てきたといわれるが、この集落は、古代の原型をほどよく保ちつつ比較的穏やかに明治に入るまで過ごしてきた。もっともこういう地政学的要因は、前に述べたように鉄道駅の敷設や名阪国道開通以降、がらりと変わった。そして、世間一般どこにでもある、地域のひとつとなっていた。

そして今 さて、冒頭でカフトの実像に近づいてみたい好奇心が執筆の動機だと書いたが、いま、その探究に始末をつけて感じるのは、そこで得られた推論の是非を超えて、太古からこの谷にただよう古層の息吹であり、また、自分とどこかでつながるかもしれない霧^{ふるさと}のかなたの人々の質朴な姿だったような気がする。この「故郷探究」は、私にとっては、学術的考察の形を取ったノスタルジア探訪でもあり、そういう故地を持てたことをいま幸せに思う。

* * *

この論考のための基礎資料は、「はじめに」で述べたように多くを亀山歴史博物館のウェブサイト⁶⁴⁾に依拠している。また本稿の校閲についても、同館に多大な労を取っていただいた。ただし、本論に誤りがあるとすれば、それは筆者が責めを負うものであることはいうまでもない。加太在住の坂平吾氏(鳥羽商船高専名誉教授)からは、地元での生活実感からの卓見、伝承、生の資料などについて長年にわたってご教示いただいた。また、同学畏友・横山浩司氏には、本論の構想段階から耳を傾けてもらい、ヒントとなる指摘を多くもらい、さらに稀観資料なども提供してもらった。皆さま方に深甚の謝意を表するものである。

⁶⁴⁾ 元亀 2(1571)年、長島一向一揆がおこり、鹿伏兎定義は一揆側に加担したが、これを攻めてきた信長軍に制圧された。このとき、鹿伏兎定義の弟の四郎(18 歳)と六郎(15 歳)は戦死する。

⁶⁵⁾ 加太邦憲『加太氏族譜』(東大出版会)、加太邦憲『自歴譜』(東大出版会、岩波文庫)、加太邦憲『欧州紀行』(私家版、なお岩波文庫版では同書抄を併せる)。本稿の筆者は、邦憲から数えてさらに 4 代目にあたる。

〔補注 1〕(5p)

斎王の出現は、『記紀』から読み取れる崇神天皇の「状況」がヒントとなると思われる。崇神天皇の身边には、夢告、占術が揺曳し、疫病や反乱が蔓延し、これらの現象をもたらす不可解な祟りを鎮めようとする苦難がこの頃にみられる。一方、全国に覇権を及ぼすべく四道將軍の派遣などが試みられ、また戸籍調査、課税制度への着手が試みられ、灌漑用の水路や貯水池も造られ、また任那へ初めて朝貢している。ここには、古代呪術的靈世界、豪族支配の終末と、あらたな「国家機構」成立の誕生のカオスをみることができるのである。

このときの、崇神天皇にいちばん必要だったのは、社会不安の象徴的な表れである大物主の処遇、他の豪族たちからの絶対的卓越性である。自らを唯一の王として、割拠する群雄に認知させることだった。しかし争いという暴力や財力という経済手段では相対的な権力しか生まないし、果てることのないカオスを増幅させるだけである。そこで、混沌の整序には、構造主義的概念用語でいうところの「普遍的媒介項」が要請されるのである。その媒介項がまさに畿内信仰圏での個別氏族を超えた日の神アマテラスであったと考える。アマテラスを、あえて手元から切り離し、皇祖神として別所に祭り上げをすることであった。群雄たちの各々の主張は、共通項であったアマテラスを経由しなくてはならなくなる。崇神は、この絶対的依り所を顕示化させることに腐心した。ついでにいうなら、掬いきれなかった大物主(= 大國主?)については国譲り(追放あるいは抹殺)が行われ、これを同じく構造主義的にいうなら、タナトス(冥界)として負の頂点を祀り上げ「外部化」するのである。

しかし、この象徴秩序創生の工夫は崇神時代に成就したとはいえないのでないか。アマテラスを安置する「別所」が定まっていなかったからである。古事記の記述と異なり¹⁾、日本書紀では、豊鋤入姫^{とよすきいりひめ}が天照大神を祀ったのは、ヤマト三輪山至近の(その場所には異説が多いが)笠縫邑^{かさぬいむら}で、崇神王朝にとっては日常生活圏である。神聖化には不十分だった。そこで、これを徹底したのは、次の垂仁天皇時代の倭姫命^{やまとひめみこと}だと思える。『日本書紀』に「倭姫命、よりて斎宮を五十鈴の川上にたつ。これを磯宮^{いそみや}と謂ふ。則ち天照大神の始めて天より降ります処なり」²⁾と述べているが、この倭姫の「巡行」による伊勢の地の決定こそが先代の崇神天皇から続く模索の果ての、「別所」の完成形であると解釈できる。太陽神アマテラスを鎮座(後世の神社形式とは姿は異なるだろうが)した場所が、ほぼ北緯 34 度 29 分であり、それは、政權地^{しきのみずかきのみや}(磯城瑞籬宮)の北緯 34 度 31 分とほとんど一致する。すなわち、ほぼ真東であり、太陽の昇る地点なのである。豊鋤入姫の試み、そして崇神・垂仁時代の倭姫命による太陽神アマテラスの伊勢鎮座という長年の模索によって、「祭政二元構造」³⁾が確立したので。崇神天皇が国家創生(「所知初国」ハツクニシラス)の天皇と古事記に記録されている由縁でもあろう。また「二元」であるからこそ、斎王在任期間は天皇のそれとシンクロするようになっている。

崇神・垂仁政權の推定時代を、諸説の落ち着くおおよそ 3 世紀半ばから 4 世紀初頭とみる。これはまた、弥生時代の終焉、あるいは古墳の出現時代と軌を一にする。もうすこし踏み込んでいえば、おそらく卑弥呼とそう遠くない時代だからこそ成り立った斎王制度は、天皇誕生と一体化する聖俗合体⁴⁾の帰結である以上、その開始時期も、必然的に 3 世紀半ばから 4 世紀初頭に定まる。カフトと斎王群行の関係は、このようにして少なくとも 4 世紀初頭ごろには始まり、9 世紀末ごろまでの 500 年間程度は続いたということになるという理由である。

〔補注 2〕(5p)

斎王群行の具体的な実施様態を語る史料は少なく、おそらく、長暦 2 年(1038 年)の群行(帛京)に随行したと思われる『春記』(藤原資房の日記)が唯一である。かつ、そこから読み取れるのも、そうとう不完全な情報で、頓宮名^{とんぐう}の記述がいくつかあるものの、群行そのものの実態は不明である。しかも、これは平安時代中期のものなので、それ以前の

¹⁾「豊鋤入姫命は伊勢の大神の宮を拝(イツ)き祭りたまいき」(『古事記』崇神天皇の項)。しかし、主語を「倭姫命」に置き換えた同文の記述が垂仁天皇の項でもみられ、これを『日本書紀』の記述と併せてみたとき、後者がより事実に近いと思われる

²⁾『日本書紀』垂仁天皇時代の 25 年

³⁾山尾幸久「初期ヤマト政權の政治と宗教」(『魏志倭人伝』講談社)。同著者編『日本古代王權形成史論』(岩波書店)も参照

姿をここから推測するのはほとんど無理がある。これより古い記録といえば、斎王が選ばれたとか、都から出発したとか、その見送りを記したという『続日本紀』の断片的記述など、小さな言及の形で散見される程度である。行路に関する情報、考古学的痕跡も確定していない⁵⁾。もう一つの史料の群れは、『延喜式』などの”式”と有職故実書である。

カフトを通過しないという説は、主として足利健亮氏などによって唱えられるものである⁶⁾。それぞれの時代の政権地から東行して布引山地を越えて伊勢側へ降りたというのである。この説から裨益するところは多々あるのだが、その上での印象は、どこか胸に落ちないのだ。

行路の現実性なのである。想定される行路には通過の相当厳しい箇所が存在する。また、地形全体を俯瞰した、現在の交通網から推し測っても、笠置山地や布引山地の横断は、容易ならないものがあると思う。思えば、東海道のように古来往来の頻繁だった道ですら、江戸幕府が箱根を開鑿するまでは、人々は北上し足柄峠から大きく迂回したものだ。あるいは、近道のはずの甲州街道に比べて、中山道の使用が圧倒的に多かったのは、甲府盆地前後の山越の難所を避けようとしたからだといわれる。身体的感覚は、史料にはなくても、人々の反応は正直なのだ。

青山峠(あるいは塩見峠)越えは、古代にどの程度通行可能だったのだろうか。また、霊亀元(715)年に都祁道開通の記事から知る「開大倭国都祁山之道」(『続日本紀』)も、その先の部分が、8世紀初頭に通行容易であったのだろうか。こういう山岳道を、女性中心の粛々とした斎王一行が、突破行を敢行する理由が理解できないのである。

いうまでもなく、峠というのは「尾根越えの道路が通じている所」⁷⁾をいうのであり、“峠”の存在を前提として行う道路の存在論議は、そもそも結論が内包されていて意味がない。つまり現今の布引山地には、“峠”として認知される箇所はいくもあるが、これを簡単に古道にまでつなぐことは、よほど慎重でなくてはならない⁸⁾。もちろんそういう地点ですら、絶対越えられなかったというのでない。おそらく土着者の一部が辿っていた“けもの道”のようなものがあっただろう。だが、これを拡大して、斎王一行の通過した街道にまで敷衍することはできないだろう。

聖武天皇が伊賀から伊勢へ布引山地を越えたという天平 12(740)年の史料(『続日本紀』)があるが、これなど、むしろ道の不在証明のように思われる。歴史的コンテクストから、聖武天皇がかなり異様な恐慌症候による遁走行動をとったことが窺えるが、緊急避難的行軍のように道なき道を強行突破したのではないか。『続日本紀』には、(天候が悪かったにしろ)「途泥、人馬疲煩」とも記述されている。天皇の行幸とは思えない。

ところが、その聖武天皇の強行路や、野営に毛の生えた程度と思える仮屋も、うやうやしく「行幸」となり「頓宮」となれば、それは歌枕的言説となり、いつのまにか実体化し、ちょうどその“足跡”に斎王の「群行路」や「頓宮」というもうひとつの言説のカケラが、後世の我々の目には、みごと蜃気楼のように重なってしまっていないだろうか。

これに加えて、平安中期に施行された『延喜式』(康保 4(967) 年)、同じく平安時代 11 世紀末から 12 世紀に成ったという有職故実書『江家次第』や『西宮記』などの史料に散見される、斎王の凶事退下の「頓宮」にまつわる言説も、あたかも万古不易にあったかのように、飛鳥・平城にまで逆照射されているようにも見える。

また、しばしば拠り所にされる「伊勢地(伊勢路)」という名前の集落は、村勢要覧によると、「往古、石地と称せしは、全地下一帯の石故、名づく」となっていて、もともとは伊勢路とは全く関係ないのである。ところが、ここには、鉄道敷設までは、事実、伊勢参詣者のために 8 軒の宿があつて栄えていたという⁹⁾。こういういかにも伊勢参宮に関係する村が

4) 「(天照大神の伊勢遷座は)大和の王権の全国支配へのあらたな歩みを象徴する」。西郷信綱『古事記の世界』岩波新書

5) 三重県内に発掘された4世紀後半(古墳時代前期)の代表的な二つの遺跡が、いずれも水辺の祭祀遺跡だという。上野市比土の城之腰遺跡と津市大里窪田町の六大A遺跡である(『三重県の歴史』山川出版)。この二つともがヤマトから伊勢に向かう道筋上にあるのは偶然だろうか。斎王の通過でしつらえられた禊の場の小さな痕跡とみるのは許されないだろうか。

6) 足利健亮「大和から伊勢神宮への古代の道」(上田正昭編『探訪 古代の道』所収 1988 年)、またこの説を敷衍する形で、虎尾俊哉編『延喜式』(上巻)の補注でもこのルートを引用している

7) 日本大百科全書(小学館)による定義。

8) 少なくとも青山峠の存在は平安時代以降だと『青山町史』1978 は述べている(『延喜式』(寅尾俊哉編)補注による)。塩見峠なら峠があったという確証があるわけではない。

9) 前田和夫「伊勢参宮街道筋の青山峠の対向集落の変貌 -交通変遷による影響-」、『人文地理』第 14 巻第 3 号、人文地理学会 1962 年

最近まであり、伊勢方面へ降りる国道 165 号線が通っていれば、これこそが、奈良時代の記録に散見される「伊勢道」へと重なるという推測に加担していても不思議ではない。

さらにいうなら、伊賀側で道に名付けられる「伊勢」も、古代には、伊勢神宮を指すのではないだろう。長らく、伊勢参拝は朝廷の公的祭事行為で、一般人には無縁だった。いうまでもなく、伊勢参りは室町ごろから起こった習俗ではあるが、大衆の「お伊勢参り」、とくに本格的なお蔭参りなどというツーリズムを兼ねたことが可能になるのは、江戸中期以降のことである。すなわち古来伊賀側でいう「伊勢」は広く伊勢国への道という方位の意味でしかないことになる。この場合の伊勢国は、その国府が鈴鹿にありその先の東国へもつながっている地点が想定されているはずだ。一方、伊勢神宮方面へ向かうというのは、その先(志摩国)も含めて、特段の用事でもないかぎり、動線として不自然なのである。おそらく古代人にとっては、そもそも地理的に行き止まりの「伊勢神宮」方向へは、特別な官用以外に向かう用事があったとは思えない。もし布引山地を越えて伊勢神宮(方面)と往復するという広い需要があるなら、その道は整備され官道に指定されていたはずだ。その痕跡がないのは、人の往来が稀であったからだと考えるほかない。また、稀であろうと、斎王の往復に必要なから、道はあったはずだというなら、その道の維持管理は誰が、どういう仕組みでおこなっていただろう。道は、人が通らなければたちまち山野と化す。

少し別の観点になるが、東大寺が領有地を主張する文書に「南限斎王上路」という記述があり、この日付が天平勝宝 7 年(755)12 月 28 日になっているため、奈良時代にすでに斎王が笠間山あたりを通過していたように取られるが周知のとおり、これは東大寺の手になる偽書であり、実際の日付は康保元(964)年 9 月 23 日であったのである。

もうひとつ、『延喜式』の凶事退下のケースで述べられる「不用初入之道」という聞きなれない初入之道とは、何をさすのか。往路全体を指すのか、その全体なら、それは、斎宮から出る一步目から帰宅の最後の一步までなのか。つまり「不用」とは、どの程度なのか、漠たる指示でありすぎる(しかも、この部分は挿入注記の形である)。また、『江家次第』にある「斎王帰京次第」に示されるルートが、時代から見て(往路が鈴鹿越えルートと考えられるので)阿保を通過する以上、これが凶事の帰還のルートと推測されるわけだが、それだけのことであり、この一事をもって、上古から当時まで一貫して、阿保＝河口ルートが存在していた根拠にはならないだろう。さらに、上古にも、往路が阿保＝河口ルートだとするなら、凶事退下ルートはどこなのだろう。当時、宮都と斎宮間に道路の選択枝の余裕があったのだろうか。

こういう錯綜の元には、『延喜式』の性格と「忌(穢れ)」の「観念の肥大化」¹⁰⁾があるのではないだろうか。

『延喜式』は当初から、杓子定規の代名詞としてあざけり言葉に用いられていた、ということは多くの辞典が説明している。凶事の退下にまつわる言説は文字づらでしかない可能性があるということを含んでおいてもよいだろう。平安時代後半にのみ適用(の可能性)のあった“式”文言であり、その凶事ルートを上古へも遡って援用できるものだろうか。制度(たてまえ)と受容(プラティク)の相関は、一筋縄では解けない。そもそも、斎王という習俗の始まった上古(3 世紀末から 4 世紀初頭にかけて)と、斎王制度が形成された奈良時代と、さらに様式文化の元で延喜式が表された平安時代には、制度や習俗の大きな違いがあったことはたしかだろう。

¹⁰ 虎尾俊哉版『延喜式』の補注